

# LA REVUO L'ORIENTA



エスペラント語研究雑誌「ラ・レヴオ・オリエンタ」  
MONATA ORGANO DE JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO

JARO VIII  
N-RO 11

第 八 年 第 十 一 號

OKTOBRO  
1927

## 目 次 (ENHAVO)

|                  |           |            |
|------------------|-----------|------------|
| 國際日本エスペラント       | 園 乾 治     | 289        |
| TRA ESPERANTUJO  |           |            |
| 海外消息及内地報道        |           | 290        |
| エスペラント初級講座       |           | 296        |
| ザメンホフの著書より       | 松 本 清 彦   | 298        |
| 笑話數篇             |           | 299        |
| フアラオーノ〔海外エス文藝紹介〕 | 曾 根 一 郎   | 300        |
| 子供〔萩原井泉水作エス譯〕    | 佐 々 城 松 榮 | 302        |
| 單語研究雜誌           | 川 崎 直 一   | 303        |
| 科學のエス語           | 森 露 夫     | 304        |
| 和文エス譯添削欄         |           | 306        |
| LITERATURO       |           |            |
| 若き母達に〔エス原作〕      | 佐 々 城 松 榮 | 308        |
| 三つの宗教〔エス譯〕       | 高 橋 邦 太 郎 | 310        |
| 俳 優〔エス原作戯曲〕      | 中 垣 虎 兒 郎 | 312        |
| リングヴァイ・レスポンドイの譯  |           | 315        |
| ALDONO           |           |            |
| ザメンホフ著作集         |           | (菊半截 8 頁分) |

JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO, TOKIO, Uşigome, Ŝin'Ogaŭamaĉi III-14  
東京市牛込區新小川町三ノ十四 財團法人 日本エスペラント學會  
[Jara abono internacia 7 svisaj frankoj]



## ★ 編 輯 後 記 ★

- ★いよいよ大会も今月になりました。大衆各地から仲秋の福岡さしておしよせようではありませんか。長崎へ、雲仙へ、阿蘇へ、別府へ。
- ★本誌本月號も發行が三四日おそくなりました。來月は九州大会の記事を満載するため四、五日おそくなるかも知れませんから。あしからず。
- ★作文添削が意外の反響があつたので面くらつています。發表期を一月くりあげて毎月20日締切にしました。
- ★内地報道は今後主として松本清彦君に整理してもらひます。急を要する報道だけは直接同君自宅（東京市外大崎町上大崎長者丸278）へ御送附の事。
- ★御寄稿を歓迎致します。
- ★前月廣告の松永氏の獨唱會は同氏感冒のため十月九日の晩に変更になりましたからふつて御參加下さい。esp-isto に限り特別に會費を50錢にするこ。
- ★秋田雨雀氏の戯曲三篇のエス譯が出版されました。中等講習會や輪講會でも御活用下さい。價は大變やすいつもりです。
- ★同時に大会を期して井上萬壽藏氏のエス讀本も美裝をこらして出現しました。大いに各地初等講習會等で御活用下さい。
- ★附録としたザメンホフ著作一覽表は多少未完成ではあるがやゝまごまつてゐると思ひます。

日本エスペラント學會編輯部

松永春一氏獨唱會 は10月9日夜6時神田駿河臺主婦之友社に変更になりました。同志の御出席をまつ。同志に限り50錢

| 前月號<br>正 誤 | 頁 行 誤 正           | 頁 欄 行 誤 正  |
|------------|-------------------|--|
| 280 11     | allogeco allogeco | 281 13 precipo precipe   |
| 280 -7     | prdfunde profunde | 281 -1 vidas vivas   |
| 註 右1 堀 堤   |                   | 268 左 8 kun filologia kaj filologiaとして<br>[arkeologia metodo の次へ |

## ~~~~~ 學會出版新刊書二つ ~~~~~

井上萬壽藏氏著 挿繪數十個入

### ★ エ ス ペ ラ ン ト 讀 本

久しくおまちかれの井上氏の讀本が新裝をこらしてでました（詳細は裏表紙の内側廣告を）

須々木 要、守隨 一兩氏エス譯

### ★ 秋田雨雀氏戯曲三篇

[菊半蔵 74 頁]  
定 價 40 錢]

雨雀氏の力作三篇をエス譯したもの（詳細は廣告第一頁に）

エスペラント宣傳エハガキ 綠色で地球を表はしエスペラントと書いたもの先年つくつたのが残つてゐますがら賣ります、下部は通信文がかけます。價10枚5錢（10枚以下お断り）、50枚は20錢、100枚は30錢（外に送料は30枚及其端數毎に2錢を加算）

## ~~~~~ 學會取次外國書 ~~~~~

[前金でなければ送本せず]

|  | 價     | 税   |
|--|-------|-----|
| Historio de la lingvo Esperanto 第二卷(ブリヅア著)新刊 | ¥3.00 | 16錢 |
| Zamenhof-Radikaro (Wister) 新刊                | 3.00  | 16  |
| Aŭstralio (新刊寫真入美本)                          | 3.25  | 16  |
| Fabelo de Andersen 第一部 (Z. 博士譯)              | 0.85  | 6   |

東京市牛込區  
新小川町3の14

財團  
法人

日本エスペラント學會

振替口座  
東京 11325 番



# LA REVUE ORIENTALE

★ JARO VIII, N-RO II ★ MONATA ORGANO DE J. E. I. ★ OKTOBRO, 1927 ★

## 國際日本とエスペラント

慶大教授 園 乾 治

近來種々の目的を以つて屢々國際會議が開催せられるやうになり日本も之に参加することが多い。例へば大正八年以來毎年數回共一回開催せられる國際労働會議、日英米を中心とする海陸軍備の制限を目的とする所謂軍縮會議又は國際聯盟の主催する國際經濟會議等の如き其例である。

是等の國際會議に於ける公用語は日英米を中心とする軍縮會議に於ては専ら英語を用ひ労働會議及び經濟會議の如く四五十個國の参加する會議に於ては佛語及び英語が公用語として用ひられる慣例である。而して佛語及び英語が公用語として用ひられる場合に於ては佛語の演説は英語に通譯せられ英語の演説は佛語に通譯せられるのであるが若し演説が是等の公用語以外の國語を以て爲さるゝ場合には演説者が費用を負擔して同伴せる通譯者によりて一旦佛英語何れか一方の公用語に通譯せられ其上更に他方の公用語に通譯せられるのであつて斯る場合には二重の通譯を必要とするのである。而して國際労働會議に於て佛英語の公用語以外で話される國語は獨逸語及び西班牙語である。獨逸語は公用語ではないにしても中部及び北部歐洲諸國より會議に参加せる者の中には之を解する者が相當多數であるが故に獨逸語の演説は靜肅に傾聴せられる。而して西班牙語は南米諸國に廣く行はれるが故に西班牙語の勢力を張る爲に佛語を解するにも拘らず態々西班牙語を使用する者もあると言ふことである。

斯の如く國際會議に於て二種の公用語を採用し或は非公用語の使用をも場合によつては承認する結果如何に通譯の手數が面倒であり時間を冗費するか。之は何人も容易に推察する處であらう。私は嘗て1925年セネバに開催せられた労働會議に出席して其豫想外に煩はしいのみならずつまらぬのに閉口したのであつたが、幾何辛抱して聽いて居ても佛英語

兩方に精通せざる限り通譯に依頼するだけでは尙ほ隔靴搔痒の感を懷かざるを得なかつた。然し之は單に私のみの感でない數年間労働機關に對する政府代表であつた某氏は著書に於て佛語に堪能でなかつた不便を述懐せられ又國際經濟會議に對する代表であつた某博士は雜誌に於て連日外國語の演説を聽かされる苦痛を訴へ正直に言へば半分は判らなかつたさへ言はれた。而して先般セネバに開催せられた軍縮會議に於て活躍した某提督は英米兩國全權を招待した茶話會に於て兩國のみで議事を進め英語の上手でない日本だけを除けるにしないやうに頼むと言つたことが當時の東京の一新聞の報導に麗々しく掲載せられたことがあつた。

之を以て見るも我國が常に是等の國際會議に於て用語上如何に不利の地位に立たねばならぬかが能く判ると思ふ。前に述べた二三の代表の述懐は彼等個人の問題である許りでなく少數の——少數の數個國の國語に堪能なる例外を除き大多數の日本人に共通の述懐であるであらう。然らば斯る述懐を棄て不利なる地位より脱れるには如何したらよいか。之に就ては外國語に堪能なることであると簡単に答へる人があるかも知れない。然し外國語に堪能なること然かも夫が數個國の國語を意味する場合に於ては非凡の偉材の外成就し得ざる處であらう。現に労働會議に於て獨逸語西班牙語が漸次勢力を加へ公用語に暗流を生じてゐる時に方りては其増々成就し難きを確信せざるを得ないのである。

然らば如何すべきであらう。之が解答は既に定まつて居る。曰く「エスペラントを採用すること」理由は簡單明瞭である。公用語を増加することは結局國際間の平和を維持し協調を圖る所以ではない却て之を決裂破壊せしむるに至るものであるに因る。私は言度い「平和を欲するならばエスペラントを採用せよ」と。(終)



## 第十九回世界大會

~~~~~北歐の自由市ダンツィヒに集ふ同志千餘~~~~~

既報の如く第十九回世界エスペラント大會はエスペラントの四十年祭を兼ねて、ダンツィヒ自由市に於て、7月28日より一週間に渡り開催せられた。同自由市當局の好意により、數々の新しい記念の催しがあつたことは既に本誌8月號にのべたが、以下順に大會の模様を報道しよう。

★7月27日(水) この時分より大會参加者の數次第に多くなつたが、ここにフランスより緑の旗をおつたて、大舉してやつて來たカラバーノが入港した。

★7月28日(木) 一方陸路のカラバーノはこの日に多く到着した。驛前には „Jubilea Kongreso” と書いたアーチを立て市内各所には緑星旗が翻へつてゐた。

夕べには大會中最も愉快なものの一つなる Interkonatiga Vespero があつた。全世界から千さいふ人が集つて何のわだかまりもなく親み合ふこの會合、かゝる會は他にあらうか。

★7月29日(金) 10時から高等工業學校で國際夏期大學が開かれた。ダンツィヒ・エスペラント會の會長エルテルマン氏等の開校の挨拶の後、第一にベルリンの郵便廳顧問ベレント氏の「長距離電話線」についての講義があり、次にストウツガルトのフオークト博士の「貨幣の統一」があつた。

同日15時より市廳で第六回國際エスペラント盲人大會が獨乙人クライツ氏の司會の下に開かれ、各地より集まつた約60名の盲人が参加した。目あき連は多大の同情を以て、之をながめたが、エスペラントが如何に彼等盲人間に「光りかゞやく光明」を與へつゝあるかを知り、心よるこばしく思つた。

記念大會の開會式は20時半より、電燈の光まぶしいシュツツエンハウスの大廣間で開かれた。ダンツィヒのエスペラントの母、アンナ・トウシンスキ夫人(85歳の老人)に aklamo を送るさ、イスブルツカー夫人は立つて開會の辭をのべ、次で役員の選舉にうつゝた。會頭に前記のエルテルマン氏をおし、副會頭にはアダム・ザメンホフ、クリムケ、ブイワイト、エレンベルク、ゲリツト、ショーフス、大石和三郎、トウシンスキ夫人の諸氏をおした。エルテルマン氏は立つて参加者一同に歡迎の辭をのべ、各國政府代表者、大會に多大の補助を

與へたダンツィヒ當局、エスペラント通りを作つたツオボット市、鐵道とパスホルトを特に簡易にしたポーランド當局等々に謝した。

オーケストラに併せてエスパーロを歌ひ、「綠星旗下の祈り」の朗讀あつて後、例の brila oratoro エドモン・ブリヴァ博士は立ち、挨拶の辭をのべ、エスペラントの idea valoro について話した。次でダンツィヒ上院議員シュトウルンク博士、ポーランド公使館顧問ザレウスキー氏、オーストリー領事ゲルホルン氏、ドイツ政府代表ドイテルレ博士、オランダ政府代表イスブルツカー氏、等々各國政府代表の挨拶があり、又オーストラリア、オーストリー、ベルギー、イギリス、ブルガリア、チエコスロヴァキア、デンマーク、ダンツィヒ、エストニア、フィンランド、フランス、ドイツ、ギリシア、ヘブライ人、ハンガリー、イタリー、日本(長谷川理衛氏)、ラトヴィア、リトワニア、オランダ、ポーランド、ルーマニア、ユーゴスラヴィア、スイス等の各國團體の saluto があり、„Fratoj, manon donu kore” を歌つて23時式を閉ぢた。

★7月30日(土) この日のプログラモは夏期大學の講演、ヘブライの diservo、協議會、遠足、分科會、幻燈講演會、ラヂオ放送での Salutparolado、上院の公式招待、festvespero 等々々々云ふ盛澤山、ざれざれに出席すべきか、参加者一同困つたらしい。協議會では、ドイテルレ博士が例の statistiko は未だ十分なる結果を得てゐないことをのべ、モリス夫人は IALA(國際補助語協會)のこゝにつき報告をした。

午後はペートリ學校でザメンホフ博士及びその墓、ノールウェー、ウィーン、ブダペストその他色々の活動寫眞を見せた。

夕20時よりダンツィヒ及びケーニヒスベルヒ放送局より各國語及びエスペラントで各國人15人が放送した。

21時よりダンツィヒ上院の招待あり、多數の名士、公人が參列した。ダンツィヒ大統領ザーム博士の歡迎の辭に對し、エルテルマン、ブリヴァー、淺田氏が答へた。

★7月31日(日) 日曜であるので例年の如くチエ氏及びロエツシエ氏の禮拜があつた。

然しこの日の ĉefa sensacio は既報の Jubi-



lea Kverko 植えの式である。美しい緑の森にかこまれた當所は緑星旗及びダンツイヒ旗にて飾りつけられ、参加する同志、見物する neesperantistoj で一パイになつてゐた。市當局者その他の辭のあつた後、ザメンホフの墓地の土をうめたリヂヤ・ザメンホフ嬢を始めとし、ギリシア、アテネの都、パラスの神の橄欖樹の下、さてはバハイ教アブドウル・バハの墓の土、世界最北都會(ノールウエー國ハンメルフェスト)の北岬の土、ザメンホフ生家の土等々由緒の有無さりまぜ色々な土がもたらされたさか。尙ほ同所にはエスペラント及び獨逸文で „Esperanto-Grundo, Jubilea Kverko plantita de la partoprenantoj de la XIX-a Universala Kongreso de Esperanto en Danzig kaj Zoppot por la memoro de la 40-jara ekzisto de la internacia lingvo Esperanto, 31 Julio 1927“ と書いた碑が立てられた。

その式を終り再びダンツイヒ市の大會場にもどり Jubilea Festvespero を開いた。こゝに於ても スエーデンのパウル・ニユレン、フィンランドのセテレ、オランダのイスブルツケル、スイスのプリグア等各國一流のエスペランチストの演説があつたが、就中フェリックス・ザメンホフ博士は「Estis tempo, kiam terura milito malhelpis la evoluon de l' Homaranismo. Sed ni ne perdu esperon kaj fidon, ni iru la vojon signitan nur rekte kaj ne flankigante, al la celo, kiun al ni montras la brila verda stelo. Eble ni ne ĝisvivos la atingon de la celo, kiel ĝin ne ĝisvivos mia neforgesebla frato, la aŭtoro de Esperanto. Tamen ni esperu.」とのべ、プリグア博士は簡単に、エスペラントの四十年の歴史を傳へ、なほ將來エスペラントは政府によつて一般に命令的に採用せられるのではなく、先づ個人的に、エスペラントそれ自身で一般の大勢をうごかして後、始めて政府により採用されるのであるから、エスペラントの勝利はかゝつてエスペランチスト自身にあり、故にすべて同志間のわづかな行きがかりや、それみをすて、たゞこの Komuna sankta celo に進むよう、そしてもしみんなが勇敢に、たゆみなく働いたならばエスペラントは生き、成長し、もはや決して變更し得ざる強い力となるであらうと述べた。

★8月1日(月) KR や UEA, ICK (この略字については年鑑を見て下さい) の協議會があり來年の大會はベルギーのアンヴェルス(アントヴェルペン、アントワープ)にきまつ

た。その他國際聯盟特別委員 フアン・ハンメル氏の招待あり、氏はダンツイヒの通用語ドイツ語(母語はオランダ)で話したが大いにエスペラントを支持した。

その夕べ行はれた萬國大會吉例の Internacia Kostumbalo は各國人銘々其國の衣裳をつけて出るのであり華美をきわめたものであるが、採點の結果一等賞は淺田夫人が得られた。★8月2日(火) 第二回協議會が開かれた。ワルデン氏がエスペラント學士院の報告を読み、プリグア氏が發音について話した。小坂氏は議論のあとに例の -ujo, -io の問題を出し、日本人にとつては所謂國際名の -io を採用するのは新しい言葉をおぼえればならぬから苦痛であると述べられた。

★8月3日(水) ダンツイヒの美しい海を、貸切りの汽船で ekskurso し、ツオボット市にて晝食を共にし、午後同市に於て更に協議會を開いた。この日なほポーランド公使ストラスブルガー氏の招待會があつた。

この日で以てダンツイヒでの大會は終りを揚げたが、

★8月4日(木) 前年來のさだまりにより大會プログラモはなほワルシャワのザメンホフの墓もうでを残してゐる。殊に當局の好意により特に旅券の査證が無料となり、鐵道に大割引があつたので數百の同志が之に参加した。

大會の閉會式は墓もうでの後ワルシャワ市廳で行はれた。市長の挨拶の後、UEAに就いての論にうつり、極力UEAを支持すべきことを議し別れた。

★8月5日(金) 多數の同志はこの日ピアリストク市にて、ザメンホフの生家の前に立てる碑の除幕式に參列するため同地に向つた。黒山の如き見物をおしわけ、同所に達するや、式はオーケストラのエスパーロ奏樂の下に莊嚴に行はれた。

式後一同は市長等列席の下に會合した。各國人代表の讃辭やカロチャイ氏のザメンホフの詩の朗讀があつて終つた。

★おこさわり この記事は大體 „Heroldo de Esperanto“ から抄録しました。締切の前日にやつと到着したので、大いそぎで書いたのですから、何かにつけて不満の點が多いでせうが、おゆるしを願ひます。くわしくは是非 „Heroldo“ か „Verda Stelo“ を御覽下さい。尙 Heroldo はその他色々な面白い記事が毎號澤山出ますから、是非諸兄の御購讀をおすすめていたします。京都、矢野圭一



# FREMDLANDA AFISA EKSBRZICIO KOLEKTITA PER ESPERANTO



【寫眞説明】 地は戸畑市で開催の海外ポスター展覽會の afiso です。〔上圖〕クララ會の秋田雨雀氏送別會。前列右より平川夫人、秋田氏、三宅嬢、佐々城夫人。〔中圖右〕横濱埠頭のブロッカー氏と椎橋氏。〔中圖左〕第四回青森縣下エスペ란チスト大會。右より、前列。河野、齋藤、毛内、成田(義)、盛田、秋田、鳴海(完)、根市、淡谷、海鳴、永澤、中列。藤原、金田、野呂、田中、古川、福地、三橋、長谷川、後列。谷山、高木(岩)、山本、佐藤健吉、高木緑、神(良)、佐藤健、東、中村、高田猛泰、淡谷(悠)、高田一二、荒闕、今、鳴海(彰)、成田(正)、最後列。小西、神(清)、山形の諸氏。〔下圖右〕横須賀の海軍技手養成所に於ける初等講習會。右より。前列。山手、新倉、米花(主催者)、松葉講師、石井、神下、深澤、中列。川戸、青木、西野木、佐々木、林、新納、後列。平松、島崎、和泉、鷺巢、太田、平石、加藤、藤尾の諸氏。〔下圖左〕函館エス會新會長小森正銳氏。(記事次號)



# 福岡へ！ 秋の九州へ！！

~~~~第十五回日本エスぺラント大會迫る~~~~

十月十五日・十六日・十七日福岡市に開かれる

十月十八日・十月十九日長崎市で二次會開かる

我等の大會がちかすきました。九州の天地は等しく我々の來遊をむかへてゐます。プログラムその他委しい事は前月號 261, 262 頁に書きしましたからこゝでは省略します。こゝには單にその重要な部分と變更された分を記します大會參加希望の方はぜひ前月號を御参照下さい。

## ★ 福岡市に於て ★

10月15日(土)19時 エス宣傳講演會(市記念館にて、芬蘭公使ラムステッド博士外數氏講演)

10月16日(日)9時 大會發會式(福岡偕行社にて、九州帝大總長其他の祝辭あり、地方代表挨拶もあり)

12時 晝食(費50錢)

13時 協議會

エスぺラント雄辯會

18時 懇親晚餐會(市内舊柳町新三浦屋にて、費2圓——博多名物水たき)

10月17日(祭日) 遠足——博多灣奈多濱にて鯛網引き蒭堀等

9時 新博多驛集合、臨時列車にて奈多へ直行(會費一圓——但汽車晝食其他の費用)

18時 解散

### 【注 意】

- ① 汽車は省線博多(多)驛下車の事。
- ② 記念館は市内電車天神町下車左へ二丁。
- ③ 地方代表挨拶——時間節約上一人2分間。
- ④ 福岡偕行社は博軌電車の下橋停留場下車城内に入り直ぐです。
- ⑤ 分科會は復活の事に決し文藝、宗教、工業者、商業者、盲人、醫師、SATの七分科とす。
- ⑥ 合宿所——市内福岡橋口町の海容館とします。宿泊料は15, 16日二泊(但15日夕食、17日朝食付)にて3圓50錢。一泊と朝食で2圓。尙婦人の宿泊は當方で御世話します。
- ⑦ 參加希望者はハガキにて前號261頁難型の形式で「福岡市大名町3の105 日本エスぺラント學會福岡支部」宛に申込の事。
- ⑧ 汽車割引券入用の方はその枚數を明記して申込の事。尙すべて大會に關する御問合せは上記「日本エス學會福岡支部」へ。

## 大會參加費用調べ

各地より博多驛迄の往復汽車賃 x  
15日より17日迄の宿泊料…………… 3.50

16日中食…………… 0.50  
晚餐會費…………… 2.00  
奈多海岸遠足費…………… 1.00  
x+7.00

## 大會後旅行團組織

大會直後 Karavano を組織し九州の三大勝地雲仙嶽、阿蘇山、別府の三班に分つて旅行す。大體の豫定と旅費は

- ① 雲仙行(二泊)(Postkongresoに合併) 13圓
- ② 阿蘇行(一泊) 10圓
- ③ 別府行(一泊) 10圓

尙詳細は御照會の事

## ★ 長崎市に於て ★ (Postkongreso)

10月17日(祭日) 奈多濱の鯛網の遊びを早目に切りあげて16時44分博多驛發(長崎行終列車にて)23時長崎着。

10月18日(火) 午前、午後共長崎市内見物。都合により郊外茂木へ遠足。夕方長崎エス俱樂部の歡迎晚餐會開催。(急ぎの方は23時の夜行(門司行)にて出發)。費2圓。

10月19日(水) 特に希望者を募り日本新八景の一たる雲仙嶽へ登山。

7時發 汽車不通に付自働車にて往復。(自働車賃6圓)雲仙に到着の上新湯、古湯にて一浴 Golfludejo を經て普賢岳の絶頂を極めて下山。17時長崎歸着。

【注意】① Postkongreso 參加御希望の方は豫め通知下さる方便宜です。

② 宿泊料(朝食付)2圓。Postkongreso の總額費用は13圓(雲仙へゆくとして)委しくは次頁の計算を御覽下さい。

★ Postkongreso に就ての御照會はすべて

長崎市銀屋町56

日本エスぺラント學會長崎支部へ



## Postkongreso 参加費

|       | 十八日  | 十九日  |
|-------|------|------|
| 宿 賃   | 2.00 | 2.00 |
| 中 食   | 0.50 | 0.50 |
| 晩 餐 會 | 2.00 | —    |
| 自動車賃  | —    | 6.00 |
| 計     | 4.50 | 8.50 |

## 内地報道

## 第四回青森縣下エスペランチスト大會

青森縣下エスペランチスト聯盟主催、青森市東奥日報社後援の第四回青森縣エスペランチスト大會は8月21日青森市公會堂に開かれた。當日は恵まれた快晴で10時よりエス展覽會を一般に公開、同志に交つて一般の人ともチラホラ見えてゐた。正午近くには各地の同志の顔も揃ひ此處彼處にエスペラントでの語ひが始る。13時プログラムに依り聯盟員會開催別室にて各エス會より三名宛委員出席、各提案事項に就きて協議す。14時ザ博士の肖像、綠星旗に飾られた會場にて聯盟總會開かる。出席者來賓を合せ約五十名。

Espero の合唱に始まり 司會者淡谷氏起つて開會の挨拶をのぶ。毛内氏の La Vojo の詩朗讀、各地エス會代表の狀況報告より議事に移る。毛内氏起立して委員會の結果報告を

## ★汽車賃二割引の特典★

参加者に對し鐵道省で汽車賃を二割引して呉れます。但し必ず博多驛又は長崎驛迄の往復切符を買ふ事。割引切符買入は10月1日から10月18日迄。通用期間は切符購入日から10月31日迄（悉しいことは前月號262頁參照）學生教師の方も是非之を利用下さい。途中下車回数は普通切符と同一。

なす。(一)青森縣下エスペランチスト聯盟を青森縣エスペラント會聯盟と改稱。(同時に規約内容修正)の件〔可決〕。(二)日本エス大會に明年より聯盟代表を送る件〔可決〕。(三)第十五回エス大會に祝電發送の件〔可決〕。(四)先輩高橋邦太郎氏に大會の名を以て敬意を表する件〔可決〕。(五)次回大會開催地の件(五所川原町に決定)更に新年度委員の推選結果報告——黒石～山本、高木、鳴海(完)。五所川原～上見、永澤、齋藤。弘前～谷山、宮川、神。青森～淡谷(悠)、毛内、長谷川。——秋田氏の祝辭演説、高橋(邦)氏よりの祝辭朗讀等に移り Tagigo の合唱にて閉會。尙公會堂玄関にて記念撮影をなし、同食堂にて懇親晚餐會開催、食卓を圍み歡を盡して終たのは17時過。(寫眞參照)

## 海外ポスター展覽會

戸畑市の同志の努力によつて今春來世界各地のエスペラント會に對し各國のポスター寄贈依頼のエス文の手紙を發して準備中であつた關門日日新聞戸畑支局主催の海外ポスター展覽會は去る9月1日から一週間英米獨其他十數ヶ國から集つた百數十枚のポスターを同市目抜場所たる明治町一丁目の各商店の飾窓内に陳列展覽をして大成功を収めた。尙三色刷の同展覽會ポスターの上部には Fremdlanda Afisa Ekspozicio kolektita per Esperanto とエス語が書きこまれてある。(寫眞參照)

## JOCK

名古屋放送局では9月20日から十日間每晚18時から30分間エスペラント語の講習を放送してゐる。講師は石黒修氏。昨年大連放送局で尾花氏がエス語講習を放送したのが我國における最初である。聴取者の數の少いことも一因であらうが JOAK や JOBK をだしぬ

いて地方の放送局がごしごしエス語講習放送を決行するのは痛快なことである。

## 藥學雜誌とエス語

日本藥學會機關誌『藥學雜誌』(日本における最も權威ある藥學雜誌)の編輯會議で服部博士の提議にてエス語論文抄録等を該誌へ採用する事の可否の問題おこり大分議論沸騰したが我が熱心な同志塚本赴夫氏の奮闘の結果編輯長朝比奈博士の採決によりエス語も無事採用される事になつた。同志諸君の利用をまつ。

## 東京醫學會雜誌

日本語で最も權威ある醫學雜誌の一たる東京醫學會雜誌の編輯長として我が西博士が就任される。蓋し今後は同誌上にも大いにエス語の抄録がのる様になることと我々一同大いに期待してゐる。同誌諸君が大いに利用されんことをのぞむ。



## 東京

★9月20日18時より東京エス倶楽部主催で日比谷公園松本樓にて九月末渡露する秋田雨雀氏送別會を開催。出席者50餘名。會食の後秋田氏の挨拶あり。成田清見、佐々木、曾根、數氏のエス語送別の辭あり。終つて同氏戯曲“Fonto de Sudroj”(エス譯)の朗讀を平川夫人、三宅嬢、守隨君の三人にてなし愉快な一晚をすごした。★★9月18日14時よりお茶の水文化アパートにてクララ會主催の秋田氏送別會あり。出席者婦人同志14名。(寫眞參照) ★9月23日18時より文化アパートにて Eskulapida Klubo の月例會あり。新に千葉醫大の助教授になられた鈴木正夫氏の送別と東宮氏追悼をかねて西、進士、鈴木諸氏の parolado があつた。

## 名古屋

名古屋エスペランチストの秋季親睦會は9月19日夜鶴舞公園前清榮軒樓上にて開催され、19時 USA 委員白木氏エス語を以て開會を宣し、ついで中部日本エス語聯盟委員山田氏は當市のエス語運動の變遷に就き縷述し、高商エス會丹羽、加藤兩氏の挨拶あつて座談に移り、23時散會。

## 上田市

★9月19日長野縣上田市に於ては19時より市民大學主催にてエスペラント講演會開催。高岡高商講師、ヴェナブルス氏は古澤氏の通譯にてエス語演説をなし長野測候所長梶間氏はエスペラントに就いての感想を話し21時閉會。★★20日18時より市民圖書館階上にてエス講習開催。(毎週火金)講習生70名。講師は古澤氏。

## 釜山

8月9日より一週間 初等講習開催、講師白南奎氏。

## 長崎

7月24日恒例晚餐會、19時より高原氏邸で開催。谷口恒二氏の支那旅行談をきく。南は廣東から北は大連に足跡を印されたもの故興深し。植村、村島兩君が船と緑の星の縁をさく。11時散會。★9月9日18時半先般大阪毎日で募集の「新日本の宣言書」に三等當選の同志濱部壽次氏の受賞祝賀會を開く。同氏は賞金にて滿蒙西伯利亞へ旅行されるが大いにエス語の活用をお願いしたい。俱樂部から特製の署名簿一冊進呈した。

## 渡邊武夫君の訃

9月5日十九の秋を渡邊武夫君が死んだ。一昨年の夏僕から講習を受けて以來父上明君と一緒に熱心な同志であつた。昨夏健康を害し永らく大學病院に入院して居た間もエス書を手から離さなかつた。遺骸は生前の希望により解剖の上クレストマトイオと一緒に荼毘

に附せられ、遺骨は父上が自ら書かれたエス文の略歴と一緒に十八日の朝秋雨煙る青山の墓地に親しい人達に護られながらしめやかに葬られた。亡き魂の上に永遠の平和あれ。葬の日西成甫謹んで記す。

## 滞米中の杉本良氏より

當地の大會は年本はグリーンエーカー、メーンでした。私も出掛けました。而し事務上の打合せが多くて餘り振ひませんでした。出席者も30人位でした。其結果ボストンのミスメリヤムがセクレタリアをやめてシカゴの奥の方のセントポールかに事務所が移りました。グリーンエーカーはボーツマスの四哩程奥で好い處でした。バハイのフェルーシツプハウスがあるのです。バハウラーの孫と云ふ青年が居りました。一寸異様に感じのする處でした。一昨晚ダンチツヒの大會の話なき、ました。プリバー博士の演説をその節レコードにしたのを出席者にプレゼントしたそうです。それをき、ましたよ。三組(プ氏の外のもある)でした。小坂君の寫眞大小色々見ました。長崎醫大の淺田教授が十月當地に見えるそうでクラージン氏など大待兼ねです。當地の連中は夏休みの様です。昨日遠足會さか云つてましたが雨で其上寒かつた爲お流れになりました。來週は行きませう。十月から又初まるらしいです。私もそろそろ勉強を初めなくてはいいけないが、すつかり放棄してしまつて誠に申譯ありません。

## ★小坂氏より

(9月3日ゼネパ發)

Estimataj Samideanoj

Hieraŭ finiĝis la konferenco de la konsilantaro de la Internacia Instituto por Scienca Organizo de Laboro kaj hodiaŭ tagmeze mi forveturos al Romo por la Internacia Kongreso de Scienca Organizo de Laboro.

Tute Via K. Osaka.

## 新聞雜誌とエス語

- ★國民新聞(9月13日)——エスペラントとラヂオ放送——(海外文藝消息欄)
- ★信濃毎日新聞(9月20日)——カナモジ欄に
- ★關門日々新聞(8月27日及び8月31日夕刊)——戸畑での海外ポスター展の記事。
- ★戸畑新聞(8月26日)——同上
- ★福岡新聞(8月28日)——同上
- ★名古屋新聞(9月20日)——エス語ラヂオ放送に就て——石黒修氏。



# エスペラント初級講座

## 【第二講】

守  
則

1. 第一講の場合とは反對に、初めから本文に入り未知の單語語法は番號によつてしらべること。
2. 本文は必ず音讀すること。
3. 全體としての意味不明瞭な點は譯文を讀むこと。

### 單語と

### 造語の研究

1. *ter'pom'o* 馬鈴薯 *tero* 土、土地 *pomo* 林檎。2. *trans'porti* 彼方へ運ぶ。尙  
造語の研究 「移植す」は *transplanti*。3. *kelke da cent'jaroj* 數百年、因に *jar'cento* = *cent'jaro*  
世紀。4. *mar'veturisto* 航海者。 *maro* 海。 *veturi* 乗物に乗つて行く。5. *Francisko Drake* ~  
*Sir Francis Drake* 十六世紀の中葉英國の生んだ有名な航海者。6. *iom da ili* ~ *iom da terpomoj*  
馬鈴薯を少し許り。7. *por plant'ado* 栽培の爲めに。8. *kresk'ajo* 植物。9. *bon'gusta* 美味  
な。 *gusto* 味。 *gust'umi* 味ふ。10. *nutra* 滋養の。11. *tubero* 塊莖、球根。12. *luksa* 贅澤を極  
めた、驕奢な。13. *en la fino* 終りに、遂に、こゝでは饗宴が終る頃になつてと云ふ意味ではな  
く、問題の馬鈴薯がさうさう運ばれて來たと云ふ程の意味に解した方がよいと思ふ。従つて  
*fine* と云ふに同じ。14. *kovrita plado* 蓋のある皿、*plado* は皿であるが、單に皿を意味するの  
でなく寧ろ料理を見た方がよい。15. *lev'igi* 立ち上る。16. *havas la honoron prezenti al vi*  
皆さんに御紹介するの光榮に浴す。17. *kun la cert'igo, ke* ...と云ふ保證付で。 *certigi* 確に  
す、確言す。18. *rosti* 焼く、烙る。19. *sur'suti* 上に振りかける。20. *cinamo* 肉桂。21. *gi* ~  
*la frukto*。22. *abomena* 嫌な、こゝではひどく不味いこと。23. *esprimi opinion* 意見を述べ  
る。24. *maturiĝi* 熟す。25. *elŝiri* 引き抜く。26. *for'jeti* 投げ捨てる。27. *foje* 嘗て、或時。  
28. *cindro* 灰。29. *bruligi* 燃す。30. *por si* の *si* は *li* 即ち *Drake* の友と同格。31. *ĝar-*  
*denisto* 園丁、庭男。32. *dis'premi* 四散する様に壓す、壓し潰す。33. *odoro* 香り。34. *baki*  
(パン等を)焼く。35. *subtera* 地下の、地中の。36. *kuiiri* 料理す。37. *supraĵe* 表面で、淺薄  
に。38. *eraro* 誤。〔注意〕以上の單語の内 *el*, *for*, *dis* 等の接頭語の用法をよく玩味して戴  
きたい。尙譯文は成可く原文に拘泥しない様に書いたから原文を熟讀した上で對照すること。

## La Terpomoj.

*La terpomoj*<sup>1</sup> estis transportitaj<sup>2</sup> el Ameriko Eŭropon unue antaŭ kelke  
*da centjaroj*.<sup>3</sup> *La marveturisto*<sup>4</sup> *Francisko Drake*<sup>5</sup> sendis *iom da ili*<sup>6</sup> al sia  
amiko por plantado<sup>7</sup> kaj skribis: “la frukto de ĉi tiu kreskaĵo<sup>8</sup> estas tiel  
*bongusta*<sup>9</sup> kaj *nutra*,<sup>10</sup> ke oni opinias ĝian kulturadon tre utila por Eŭropo.”

*La amiko de Drake* pensis, ke la ”frukto,, estas la verdaj tuberoj,<sup>11</sup> kiuj  
pendas sur la kreskaĵo. Kiam venis la aŭtuno kaj la tuberoj jam estis  
flavaj, li invitis multe da eminentaj gastoj al *luksa*<sup>12</sup> festeno. *En la fino*<sup>13</sup>  
oni alportis kovritan pladon<sup>14</sup> kaj la mastro leviĝis<sup>15</sup> kaj diris belan parol-  
adon: “Nun mi havas la honoron prezenti al vi<sup>16</sup> frukton, kies semon mi  
ricevis de mia amiko, nia fama *Drake*, kun certigo,<sup>17</sup> ke ĝia kulturado estos  
tre utila por Anglujo.”

*La invititaj parlamentanoj* gustumis la frukton, rostitan<sup>18</sup> en butero kaj



sursûtitan<sup>19</sup> per sukero kaj cinamo<sup>20</sup>; sed ĝi<sup>21</sup> estis abomena.<sup>22</sup> Ĉiuj esprimis opinion,<sup>23</sup> ke la frukto eble estas bona por Ameriko, sed en Anglujo ĝi ne maturiĝas.<sup>24</sup> La mastro ordonis post kelke da tagoj elŝiri<sup>25</sup> kaj forĵeti<sup>26</sup> la kreskaĵojn.

Sed foje<sup>27</sup> matene, promenante en la ĝardeno, li rimarkis nigrajn, rondajn tuberojn en la cindro<sup>28</sup> de la fajlo, kiun ekbruligis<sup>29</sup> por si<sup>30</sup> la ĝardenisto.<sup>31</sup> Li dispremis<sup>32</sup> unu per la piedo: ĝi havis agrablan odoron,<sup>33</sup> tio estis bakita<sup>34</sup> terpomo. Li demandis la ĝardeniston, kio ĝi estas. La ĝardenisto diris al li, ke li trovis ilin ĉe la radikoj de la amerika kreskaĵo.

La amiko de Drake komprenis nun ĉion. Li ordonis kolekti la subterajn<sup>35</sup> tuberojn, kuiri<sup>36</sup> ilin, kaj invitis la parlamentanojn. Kredeble li diris, ke kiam oni juĝas supraĵe,<sup>37</sup> oni ofte faras grandajn erarojn.<sup>38</sup>

(El "Unua Legolibro de Dro Kabe).

## 馬 鈴 薯

馬鈴薯は數百年以前に始めて亞米利加から歐羅巴へ輸入されました。航海者フランツイスコ・ドレークは一友人にこれを植えて見る様にさ少し許りの馬鈴薯を送つて次の様に書いてよこしました。"此植物の果實は美味で且滋養がありますから、これを栽培する事は歐羅巴にまつて極めて有用な事と存じます、こ。

ドレークの友は此"果實",を木になる(植物にブラ下る)塊莖であると思ひました。秋が來て塊莖が已に黄色く色付いた時、彼(ドレークの友)は多數の知名の客を驕奢な饗宴に招待しました。終に蓋をした料理が運ばれました。御主人は起立して立派な演説をしました。"さて、私は皆様方に或果實を御紹介するの光榮に浴します、其果實の種子は私の友であるあの有名なドレーク氏から貰ひましたもので、此果實の栽培は英國にまつて將來極めて有用なものであらうと云ふ保證付なので御座います。"

招待に與つた議員達はバターで焼いて砂糖と肉桂を振りかけた此果實を味ひました。處がそれは恐しく不味いものでした。誰も彼もが此果實は亞米利加では(出來が)よいのであらうが、英國では熟さないのだと云ふ意見を述べました。數日後御主人は此植物を引抜いて捨て、しまふ様に命じました。

而し或朝の事、彼が庭を散歩して居りますと、園丁が自分の爲に燃して呉れた火の灰の中に黒い丸い塊莖のあるのに氣付きました。彼は足で其一つを壓潰してみました。するとそれは氣持好い香りを持つて居りました。それは焼かれた馬鈴薯だつたのです。彼は園丁にそれが何であるか尋ねました。これは亞米利加の植物の根にあつたものですと、園丁は彼に申しました。

ドレークの友も今となつては何もかも解りました。彼は地下の球根を拾ひ集めて調理する様に命じ、例の議員連を招待しました。淺薄に物事を判斷すると、往々さんでもない誤をするものだと言は語つたことでせう。



# Zamenhof の著書より

[ 1 ]

松本清彦

私は日頃 Zamenhof の著書を繙きます時、面白いと気付いた個所、變つた使ひ方だと思つた所、極めて容易な事柄で、いざエス譯しようと思ふ時チョット思ひ迷ふ様な文句等へ下線を引くことにして居りますが、次に掲げますのはそれを集めたと思ふに過ぎません。従つて極く主觀的に私一個人の立場から見て面白いと感じたまでの事で、中には左程面白くないものもある事と思ひます。又無論此外にも一層珍らしい用語が澤山あるに相違ありませんから、其點は此方面御研究の同志から御教示に與りたいと思ひます。差當り Zamenhofa Verkaro 中の Marta から繙くことにします。

## (1) en la daŭro de.

少し注意して Zamenhof の書物を讀むと到る所に此言葉が散在してゐます。それは此言葉が意味の上から云つて頻繁に使はれる性質のものだからに相違ありませんが、それ許りではなく Zam. が好んで使用したからである様に思はれます。吾々は此美しい言葉を忘れて *dum* を以てする場合は可成に多い様です。これは英語の *during* に支配されるからではないでせうか。Zam. が *dum* を *en la daŭro de* の代りに使つてゐる例は比較的稀で、*dum* は多く、(…する間に、…する一方に、)の意味に使はれてゐます。次に二三の實例を引用すれば、

a) Tiu ĉi rigardo en la daŭro de *momento* laŭkuris de la piedoj ĝis la kapo … 瞬時の間に。(p. 47)

b) Tio, kion ŝi suferis en la daŭro de *kvaronhora ekskurso* en la urbon, … 街へ出かけて行つた十五分間の間に。(p. 13) en la daŭro de *la tuta tago*. 一日中 (p. 43) en la daŭro de *ok jaroj*. 八年間 (p. 38) 等、數へ切れぬ程あります。以上の例によつても明な様に、これは時間の長短に關係なく用ひられてゐます。尙 *dum* を *en la daŭro de* と同じ様な場合に使用した一例を挙げれば、

Ŝi opiniis, ke per glaso da lakto kaj per kelke da bulkoj ĉiutage ŝi povos *dum kelka tempo* sufiĉe subteni siajn fortojn. しばらくの間は (p. 70)

## (2) da kiuj.

此用法は文章の關係上 *da* を關係代名詞の前へ出しただけで、例へば、*estas tre multe da homoj* を *homoj*, *da kiuj* estas tre multe とする類です。而しあまり見かけない様に思ひます。

Diinoj, *da kiuj* vi havas sufiĉe multe! (p. 51)

Se pasos ankoraŭ kelke da jaroj da tia vivo, vi fariĝos unu el tiuj homoj sen celo,

sen okupo sen estonteco, *da kiuj* ni sen tio jam havas tro multe …

*Da* personoj, *kiuj* deziras doni lecionojn de komenca instruado estas multe pli ol da tiaj, *kiuj* volas ilin preni, 一初步の課目を教へたがつてゐる者は (p. 73) それを受けたがつてゐる者よりも遙かに多い。

尙これに類似した用法に斯う云うのがあります。

Vivis malriĉa vilaĝano; multaj infanoj, sed *da havo*—nur unu ansero. 子福者ではあつたが財産(持ち物)としては一鵞鳥一羽きりでした。(Esperantaj Prozaĵoj.)

## (3) grandmonda sinjorino.

直譯しても大體の想像はつきますが、所謂 "Society lady", "上流社會の婦人", "社交的な婦人", のエス譯です。

Marta ne estis *grandmonda sinjorino*, kiu sur velura sofo de salono sprite konversacias pri emancipado de virinoj …… マルタは廣間にある天鵝絨のソファに腰をかけて小賢くも婦人解放の問題を話頭に上す様な上流社會の婦人(社交的な婦人)ではなかつた。

尙、最新流行の装ひをこらした女のこゝろを、Zam. は *virino kun lastmode aranĝita vesto* 又は單に *virino vestita laŭ la lasta modo* と書いてゐますが、今日の様に、英語でもない "modern girl", と云ふ言葉が盛に往行する様になつては以上の様な長い丁寧な言ひ現はし方では間に合ひますまい。誰方が適切なエス譯を。

## (4) trafi ɔ celi.

兩者共可成廣い意味に使はれるので、誠に便利な言葉ですが、それだけ困難なわけです。私は此種の "氣持", でのみ理解しうる言葉に出會ふ毎にエスベラントの *vivanta lingvo* であることを強く一層感じます。trafi の元來の意味は *trafi* ~ 適中する、命中する、中る、中てる。



# 笑 話 數 篇

## ★ DENTISTO EN VILAÇO ★

〔村 の 齒 醫 者〕



Viro, kiu volis eltirigi denton, al la dentisto: “Ĉu vi ĉiam ne uzas narkotikon?”

La dentisto: “Ne, mi ne bezonas ĝin, ĉar sen narkotiko ĉiuj pacientoj jam sveniĝas....”

【譯】 齒を抜いてもらはうと思つた男齒醫者に向ひ「何時も麻酔劑を使用せないのですか」

齒醫者「えゝ、その必要がないのですよ、麻酔劑をかけなくたつて大抵氣を失つて終ひますから。……」

## ★ MALNOVA FASONO ★

〔昔 の 流 行〕

— Mia edzo diras ke mi ŝajnas dek jarojn pli juna ol mi efektive estas, kiam mi vestas min per tiu ĉi vesto.

— Jes, vere.... Tiu vesto havas fasonon antaŭ dek jaroj.

【譯】 私が此の着物を着ると實際十年位若く見へると主人は云ひます。ホントにそうです。其の着物は十年前の流行でありましたから。



## ★ DIFERENCO DE OKUPO ★

〔役 目 の ち が ひ〕

“Mia frato estas aktoro. Lastatempe li akiris grandan famon. Kaj la spektatoroj ĉiam atendegas ke mia frato aperas sur la scenejo.”

“Ankaŭ mian fraton atendegas la spektatoroj.”

“Ĉu vere? Via frato do estas aktoro?”

“Ne, tute ne. Li estas kelnero en la teatro.”



【譯】 「妾の弟は役者よ。此頃人氣がでゝれ。お客様は皆弟の出てくるのを待遠しがつてゐるわ」

「妾の弟だつてお客様にはいつも待遠しがられてゐますわ」

「そう？ ではあなたの弟さんも役者？」

「いゝえ。劇場のボーイなんです——」



# La Faraono

【泰西エス文藝梗概紹介】

曾 根 一 郎

1. Esperanto を讀む人で D-ro Kabe の名を知らぬ人は無い。Kabe の著作目録の中に La Faraono 三卷のあることは誰も見逃がすまい。私は今その La Faraono の荒筋(筋書といふより覚え書き)を書いて見ようと思ふ。何にしる日本譯にしたら四百字原稿紙二千二三百枚にはなる大もの。それをたつた十枚づつの三回ですつさばさうといふ頗る亂暴な然しそれでも詳しい紹介か翻譯の機會の來るまでの「覚え書」にはなるであらう。そのおつもりで讀んで下さい。

2. La Faraono は B. Prus の romano で原作は Pola lingvo. 同じポーランド作家ツエンキウイッチの歴史物「クオヴアヂス」と同様、大がかりな歴史小説。しかし La Faraono にはクオヴアヂスとは違つた意味で私にはとても面白い。さしあたり世界文學全集には是非加へべきものの一つである。

3. 舞臺 エジプト。

4. 時代 キリスト以前十一世紀、今から約三千年前。

5. 此の小説の脊骨。老帝 Ramzes 12 世は病弱で、政治上の煩雜な事務をいさひ、自ら進んで宗教にかくれ、政權の一切は僧侶團の手にある。當時の僧侶は單に祭祀の事だけでなく、科學教育政治軍事外交等のあらゆる力を握つて居る。若い皇太子の Ramzes は霸氣に富み、勇敢果斷で、百姓の苦痛に同情し、政權を自己の一手にをさめて、萬民にその生を樂ましめんとして居る。そして貴族を味方につけて僧侶團との間に深刻な暗闘が起る。皇太子は父王の死にあひ、やがて、位につき Ramzes 13 世を名乗る頃になつて、暗闘は明るみにさらけ出され、國を舉げて争闘の巷になる。僧侶團の代表者 Herhol 等は一時非常な苦境におちいるが、科學の力(日蝕の豫知)と巧妙なるスパイ政策を以て愚民を翻弄し遂に Ramzes 13 世を斃して、後おされて自ら王位に登る。此の争闘の間をぬつて御用商人の國際的陰謀あり、迷宮に山積せる珍寶をさり出さんとして自滅する怪僧あり、或は清楚白百合の如きユダヤの乙女あり、或は妖艶毒婦の如きフェニキヤの尼僧あり、比類稀なる二重人格的透視者あり、怪奇なる沙漠の戦争あり、古代人の奇異なる信仰、珍らしきミイラ作りの細かい敘述もあれば、皇子ラムセス

が月に浮かれた戀の微行あり、下層民の塗炭の苦しみのかたはらには、宴たけなはにして一切の燈火を消す貴族の肉慾天國あり……と書きたてたらキリがない。

6. 人物 數へ切れぬほど。然しさしあたり主要な人物の名は次の通り。他は話の途中で必要に應じて出すこと。

- a. Ramzes——kronprinco で後には Faraono になる。此 romano の中心人物。
- b. Herhol——ĉefministro で且つ ĉefpastro. そして Militministro でもある。つまり政治、宗教、軍事の三權を一手に握つて居る。Ramzes の敵役。
- c. Pentuel——Herhol の秘書。百姓出身の僧侶。Ramzes に同情を持つ。
- d. Mefres——Herhol の次に有力な老僧。
- e. Tutmozis——Ramzes の adjutanto で且つその kuzo. Ramzes の最も信任する者。
- f. Eunana——oficiro. 後には Herhol の命を受けて Ramzes の近衛隊にスパイとなつて入り込む。
- g. Dagon——フェニキヤ人 御用商人。
- h. Sara——ユダヤ人の娘 Ramzes の amatino.
- i. Kama——フェニキヤ人の尼僧。
- j. Likon——ギリシヤ人で相貌が Ramzes に酷似して居る。透視の能力あり。老僧 Mefres に催眠術をかけられて、Ramzes を刺殺し自分も Ramzes に殺さる。

差しあたり以上十人の名を擧げておいて話をする。

7. Ramzes は 22 歳で kronprinco になつた。Memfis 軍團の指揮權を得るために、試験的に演習を指揮する。軍隊の行進中に、Herhol の部下 Eunana が途上に横はる skarabo を發見した。skarabo に對する迷信のために、方向を變じて隊を進めればならぬ事になり、百姓の十年間晝夜苦心して掘つた灌漑用の堀を埋めて通路を急造した。百姓はそれに反抗して笞打たれ、遂に悲觀して縊死する。後に Ramzes はその縊死體を見て心を動かし、深く百姓に同情する。

8. 此演習中に彼は Tutmozis と二人で、隊を離れて散策して居るうちに、ユダヤ人の美しき娘 Sara に行き遇ひ、戀心を起して意を Tutmozis に含め、遂に自らの莊園に迎えて寵愛一方ならず。



9. 演習中に於て Ramzes は十分にその手腕を現はしたが、指揮者でありながら勝手に隊をはなれたりしたために、つひに希望通り Memfis 軍團の指揮權を得ることが出来なかつた。Ramzes は之を以て Herhol が父王に對して悪意の報告をして邪魔をした結果だとして心中深く Herhol を憤る。

10. Ramzes は金の必要に迫まれて、母 Nikotlis に乞ふも容れられず、遂に Tutmozis の助言に従つてフェニキアの金貸 Dagon から金を借りる。それが縁となつて Dagon がすつかり御用商人となつてしまふ。

11. Sara は Ramzes から bieno を與へられて、豊かな生活をして居るが、沃土を齎してくれるナイル河の定期的汎濫の時期がおくれたのを、ヘブライ女 Sara の呪にかゝるものとして無知な暴民が Sara を傷ける。その時 Pentuel が現はれて暴民を鎮めて Sara を助ける。Pentuel は自分の名をかくしてカゲヒナタなく Ramzes に好意を持つて居る。

12. Sara を傷けた暴民を吟味するために非常な疑獄が起る。然し犯人は現はれない。或機會に Ramzes がそれを知つて人民の苦痛に同情して全部釋放する。その時にも Pentuel の秘れた助言があつた。

13. Pentuel は Herhol の秘書ではあるが、百姓出の傑僧であるだけに、若き Ramzes の英雄的稟質に目をつけ、Ramzes を助けて幾分にも人民を幸福ならしめるために施設經營せしめようと努力して居る。

14. Dagon は Ramzes に金を貸し、其抵當として Ramzes から bieno を澤山あづかつて、甚だしく苛斂誅求する。例へば税の取立に應じないものは、税吏のために頭を逆にして水の中に突つこまれるといふ有様。Ramzes が變装して小舟をナイルに浮べた際、偶然此の有様を見て大いに怒り收税吏を笞打ちて人民を慰撫す。

15. 之等の事が語り傳へられて若き Ramzes が位に即いたら、税金は全免されて、人民はその生を楽しむことが出来る云々と噂がひろまる。この噂は Herhol 等の非常に嫌がるどころ。Ramzes のやり方を過ぎたことだとして僧侶等大いに喜ばす。

16. Dagon は Ramzes の怒りに振れたのでその心を和らげやうと、高價な贈物を持參して行くが相手にされない。搦手から廻はつて Sara に贈賄するが之もまた相手にしない。然し Ramzes は金に困つて居る。Dagon と縁を切ることは出来ない。それで Dagon が若いフェニキアの尼僧を送つて「お怒り拂ひ」

の舞をさせたのを機會に、再び Dagon に御用を命ずる。

17. Ramzes が Kronprinco の身でありながら金に困つて居るのには理由がある。父王 Ramzes 12世は温和な性質で僧侶等をおさえつけることが出来ず、却つて寺院に對する献納を無際限にやらされて御手許頗る不如意、ために御領地の年貢を抵當に商人から借りて居る。ところが僧侶等は寺領の税金は無し、人民及王室からの寄進は殖える一方で甚だ内福な生活を營んで居る。

18. 僧侶等は宮廷及貴族等の勢力を弱くするためにも、彼等の財産を増させない工夫をした。宮廷及貴族等は年貢を抵當にして、外國商人や僧侶及寺院から十割の高利で借金した。一面から見れば、Dagon の如きフェニキア商人は僧侶及寺院の商賣敵である。従つて僧侶等はフェニキア商人等を指して國を亡ぼすものと惡罵して止まなかつた。

19. Ramzes が英邁の資をいたゞいて朝家の式微をなげき、僧侶の權柄を憤つたのも無理はない。然し彼は父王の見る如く、「獅子の勇猛と兀鷹の慧敏を一身に兼備する英雄兒」である。機を見るに頗る敏。自分の出過ぎた行爲が父王の御機嫌に觸れ、Herhol に不快をいだかしめたと知るさ、ひたすら啼かず飛ばすの蟄居で謹慎の意を表して居る。

20. Herhol はそんなに悪い人間ではない。彼はたゞ僧侶階級の威信をおさすまいと考へて居る。そして彼の個人的慾望は、自分の娘を Ramzes に嫁はして、自分は外戚として、權力の地位を握つて居たいといふにある。ところが最後のドンツマリまで其の決意で居たが、Mefres の野望のために Ramzes を失つたので、その意を果たさなかつたのである。

21. 話がすこし先走りし過ぎたが、つまり Herhol の方では、Ramzes は血氣の勇にかられて自分を敵の様に思ひたがるが、今にその角も折れて温和になるだらう、さうすれば娘を嫁にやつて、自分は外戚として、……と考へて居るので、決して Ramzes に惡意は持つて居ない。

22. それにもまた理由がある。Ramzes の母 Nikotlis は čefepiskopo の Amenhotep の娘である。Ramzes 12世の角を折つて娘を與へた Amenhotep の故智にならう、といふのが Herhol の腹だ。Herhol 自身も Amenhotep にさりたてられてその後繼となつたのだから、Nikotlis に對する義理からも Ramzes に惡意をはさむ理由は無い。(續く)



# INFANOJ

【子 供】

de Seisensui Ogiŭara

Esperantigis M. Sasaki

街上に遊んでゐる子供達を見ると、この子供も楽しさうである、學校へ向つて行く子供達も、皆勇んで歩るいてゐる。子供達はいろいろ爲たい事が澤山あつてたまらないといふ風だ、又、自分の見た事や聞いた事を其友達に話しても話しても盡きないといふ風だ。つまり、彼等は「人生」といふものゝ首途に立つてゐるといふ事、其事だけを以て、いつも愉快であり、又、心が張りきつてゐられるのだ。是が自然なのだ、これが本當なのだ。さうして見ると、「人生」といふものは、彼等子供の心に期待せられてゐる通り、實際、楽しく味ふに足り、又、潑刺さしたものであるべきだと思はれる。現代の私達おこなが考へてゐるやうに、人生といふものは苦しくて、退屈だといふ風な考は、その根本に於て何か重大なる錯誤があるのではないか、其の誤謬を是認する爲めに、私達は、不自然な迷路に陥つたものではないか、と思はれる。

私達も亦嘗ては、子供達として、自然の道を歩いてゐたものだ、それが何時から、何故に、誤る事になつたのか、其事を突きさめなければならぬ、其處から出直さなくてはならない。而して、私達の後から來て、私達と同様に誤るかもしれない人々をも警めなくてはなるまい。

Kiam mi rigardas infanojn ludantajn sur la strato, ili ĉiuj ŝajnas feliĉaj. Infanoj irantaj lernejon ĉiuj vigle marŝadas. Ŝajnas ke infanoj estas plenplenaj de diversajoj kiujn ili volas fari. Samtempe ili kvazaŭ senfine havas informojn por siaj amikoj pri aferoj, kiujn ili aŭ vidis aŭ aŭdis. Unuvorte ili ĉiam povas esti gajaj kaj vivplenaj pro la nura fakto ke ili estas je la ekpaŝo al “homa vivo”. Tio ja estas tute natura, tute prava. Konsekvence, “homa vivo”, mi pensas, devas efektive esti gaja, ĝuinda, kaj vigla tiel kiel atendas la koro de infanoj. Ĉu ne la ideo de ni plenaĝuloj ke la homa vivo estas doloriga kaj enuiga, havas tre gravan eraron en sia fundamento? Ĉu ni, por pravigi tiun eraron, ne devojaĝis en nenaturan labirinton?

Ni ankaŭ en nia infaneco iradis naturan vojon. De kiam kaj pro kio ni ekeraris ni devas traserĉi. Denove ni devas ekpaŝi de tiu punkto kie ni lasis. Kaj ni devas averti tiujn kiuj venante post ni, ankaŭ erarus same kiel ni.

【註】 ŝajnas feliĉa 幸福にみえる。vigle 元氣よく。plen'plena... 一杯にみちた。sen'fine 無限に。informo 報告。viv'plen 生々した。nura fakto ke... といふ單なる事

實。plen'aĝ'ulo 大人(オナ)。dolor'iga 傷ましい。enu'iga 退屈な。fundamento 基礎。prav'igi 是認す。ne'natura 不自然の。labirinto 迷路。ek'erari。ek'paŝi。tra'serĉi。



# 單語研究雜話

[ 10 ]

川崎直一

## 41. sia.

Edinburga Kongreso の報告書に Lippmann が *refleksiva pronomo* の研究をのせている。一部分だけ抜書する。

Karlo ne lasis sin bati (=esti batata) de sia fratino. Karlo ne lasis, lin (Paŭlon) bati (=esti batata) de sia (=de Paŭlo) fratino. —sed: Karlo ne lasis sian fratino, bati (akt.) lin (=Karlon aŭ Paŭlon). —Karlo ne lasis lin, bati (akt.) sian (=de Paŭlo) fratino. —Karlo ne lasis lin (Paŭlon), bati lian (=de Karlo) fratino.

Kongresa Raporto には必ず Prezidanto de lingva komitato がその前年中の活動の結果を報告しているから、言語の進歩振りを調べるのにはこれを讀むのが最も手近かな方法である。なを詳しくは *Oficiala Gazeto* (最近はない) をあさるがよい。

まさまつた Esp. の歴史としては Adam の (最も詳しい) と Privat (文章が奇麗) のが普通である。

## 42. gramatiko.

最も組織的なのは Aymonier, *Grammaire Complète d'Esperanto* であろう。科學的な分類と信用すべき用例のあるのが喜ばしい。Cox, *Grammar & Commentary* は英國流の實用的精神のあらわれた書で理論は少いが、言葉の *praktika uzado* を親切に説明している。371ページの大著で詳しい *indekso* もついているし、いわゆる“寶鑑”として座右におくべき書である。P. Christaller, *Die Grammatik von Dr. Zamenhof mit Erläuterungen* はエス獨兩文對照で, Anstataŭ „pranepo“ oni *prefere uzu* „postnepo“ なんて著者の面白い *opinioj* がならべてある。まず一種の文法隨筆である。

Sintakso と名のついたものには Fruictier と Devjatnin のものがあるが、極めて *elementa* で簡単である。今後この方面に良書の出るのが望ましい。

その他 Fruictier, *Vortfarado laŭ Fundamento*; Fauvart-Bastoul, *Ŝlosilvortoj* (*prepozicio, afikso* 等の用法を説明したもの); Wüster, *Verhältniswörter* (彼一流の前置詞論); Aymonier, *Dérivation Comparée dans les Langues*

*Naturelles et Artificielles* (エス佛兩語の *vortderivado* を比較研究して Esp. のそれが合理的で實用的であることを證明したもの) 等の *monografio* (特種論文) は現在はいまだ多くないが、これから後はうんと出なければならぬ。

言語學入門としては最近 Collinson, *Homa Lingvo* が出た。Lambert, *Bukedo* には *vorto kaj ideo, vivo kaj morto de lingvo, internaciaj lingvoj* 等 *sciencajo* をよくわかるように書いてある。

國際語史としては今なを Couturat et Leau, *Histoire de la Langue Universelle* であろう。すてきに良いものではないが、他に類書が無いからさういう意味で *unika* な地位をしめてゐる。Guérard, *Short History of International Language Movement* は價ばかり高くして批評的部分が貧弱だけれど、英語で書いたものではこれか、或は Pankhurst, *Delphos* (著者の結論には賛成しかねるが、要領を得たそして最も新しい材料を集めている) かなを見るよりしかたがない。Esp. で書かれた國際語史が當然出るべきである。

## 43. vortaro.

*Oficiala vortaro* としては *Universala Vortaro* 以後には *Oficiala Klasika Libro* があるだけである。しかし佛、英、獨やイタリー、スペイン、ポルトガル語で譯を與えてあるので我々日本人にはあまりありがたない。

Zamenhof の *privata verko* (或は共著) であるエス露、露エス、エス獨、獨エス辭典は手にも入りにくいし、又今では *historia signifo* しか持たないので特殊の研究家の外あまり用事がない。

Esp. を Esp. で説明したものでは第一に Boirac の *Plena Vortaro* があげられる。少し古くなつてゐるが、その的確な解釋は参考に値する。*Vortaro de Kabe* は語数は前者に較べると甚だしいが、*klare kaj detale* に *difino* を與えているので多くの人に愛用されている。唯時々一般の用法にそむいているのがあるから、それを注意せねばならぬ。(例. *krabo* は Kabe によればやごかりだが普通にはかに)。目下の急務は用例をあげた *oficiala* なエスエス辭典を作ることである。(以下次號)



# 科學の 에스 語

## Psikanalizo 【精神分析學】

Psikanalizo estas metodo por esplori la subkonscion, elpensita de Sigmund Freud, la Wiena kuracisto, ĉirkaŭ la 1895, kiam li havis okazon kuraci kelkajn histeriulojn.

Ekzistado mem de la subkonscio, tia kia ĝi respondas al la nuna signifo de la vorto, estis eltrovita antaŭ proksimume triono da jarcento. Ĉirkaŭ la 1890 skribis William James: “La plej granda akiraĵo por la psikologio estas la eltrovo de mondo situita sub la sojlo de nia konscio.” Li proponis ke oni nomu “problemo de Myers” (laŭ nomo de la angla aŭtoro kiu tiam estis plej multe laborinta por pruvi ekzistadon de tiu subkonscia mondo) la determinadon de ecoj kaj funkcioj de tiu subkonscio.

Tiun problemon de Myers la psikanalizo nun solvas pli kaj pli, kaj ĝiaj adeptoj siamaniere parafrasas la frazon de James, deklarante ke de nun la historio de psikologio dividiĝas je du periodoj: antaŭ kaj post Freud.

Depost Freud la nekonscio ŝajnas al ni ne nur kiel magazeno da mil-mil imaĝoj malaperintaj, mirakle reestigeblaj, sed ankaŭ kiel fonto de instinktaj aktivoj potencaj kaj diversaj, kies funkciado determinas — en pluraj punktoj — funkcion de nia klara konscio. Tio ne plu estas la marfundo kie dormas romprestajoj de galeroj kaj ŝiparoj, tio estas la

精神分析學と云ふのは潜在意識 (sub'konscio) を探る方法であつて、ウキンの醫師ジグムンド・フロイドが 1895 年頃數人のヒステリー患者を治療した際に考へつたものである。

この潜在意識と云ふ單語の現在の意味に適應するある意識があると云ふ事自體は約30年前 (一世紀の三分の一以前) に發見されて居たのである。1890 年頃、ウィリアム・ジェームスは次の如く書いた。「心理學にまつての一大收穫は吾々の識閥下に在る世界の發見である」を。そこで彼は、この無意識の性質と作用の判定を、當時その無意識界の存在を證する爲に最もその勞をつくした英國の著者に因んで、「マイエルスの問題」と名づけやうと提議したのであつた。

このマイエルの問題をば今や精神分析學は次第次第に解明し、進んでその一派はおのれの方法に随つてジェームスの言葉を敷衍し、今後心理學の歴史は、フロイド前及びフロイド後の二期に分かれると稱して居るのである。

フロイド以後にあつては、この無意識は吾人にまつてもはや單なる數千數萬の消え去り奇蹟的に再現され得べき幻像の一倉庫には止まらずして、又、有力にして種々なる本能的動力の源泉であり、その作用は多くの點に於て吾々の明白なる意識の作用を決定するものと思はれるのである。これはもはや難破した新古の船舶の殘骸が眠る海底ではなくして、それは豊肥な花園の地床であつて、そこから



sub-grundo de fruktdona ĝardeno, el kiu tiras siajn nutrajn sukojn la tuta kreskaĵaro disfloranta.

Psikanalizo estas precipe metodo por esplori la subkonscion. Konatiĝi kun la psikanalizo — estas kompreni ĝian metodon kaj ekprovi sian lertecon en uzado de tiu ilo.

Ofte, tamen, identigante la rimedon kun ĝiaj rezultoj, la adeptoj prezentas psikanalizon kiel doktrinaron pri la naturo de la subkonscia Mi, kiel novan psikologion. Ili similas je iu Pizano de la 17-a jarcento, kiu estus nominta “teleskopion” la opiniaron de Galileo pri la satelitoj de Jupitero, kaj pri la tuta suna sistemo.

Ne estas senutila la insistado pri tio. La malsameco — tre grava, kiel oni scias — kiu ekzistas inter opinioj de diversaj psikanalizistoj grupoj, neniom forprenas el la valoro de la ilo uzata de ĉiuj. Malsama estas nur la interpretado de l' faktoj, kiujn psikanalizo malkovris por ili. ....

Psikanalizo do estas ne nur esplora metodo kaj klariga teorio, sed ĝi havas ankaŭ alian funkcion. Je tiu tria vidpunkto, se oni konsideras la praktikan celon okaze de kiu ĝi estis elpensita, oni povas vidi en ĝi ankaŭ — aŭ precipe — terapeŭtikon, kaj diskuti pri ĝiaj meritoj, kompare kun aliaj psikoterapiaj metodoj. Same okazas ĉe la eltrovo de la Roentgen-radioj kaj en la sciencoj kiuj devenas el ĝi: niaj samtempuloj povas vidi en ili ne nur radiografion, la novan ilon por konstati difekton de internaj histoj, sed pre-

百花爛漫たる全植物はその養分なる汁を吸ひ上げるのである。

精神分析學は無意識を探究する一方法である。即ち、精神分析學に通曉する事は、その方法を理解することであり、この道具を使用しておのれの巧みさを試みる事なのである。

しかし、時にはこの手段とその結果を同一視して、この派の者は精神分析學をば無意識的自已の性質に關する學說新しき心理學とする。かゝる輩は望遠鏡學(望遠鏡構成法)を稱してガリレオの木星の衛星に關する理論及び全太陽系に關する理論なりとなした十七世紀の一ピサ人の如きものである。

吾々はかゝる點の理非を主張するも益ない事である。各派の精神分析學者相互間の諸主張に存する異同は誰もが知る如く甚だ重大なるにも拘らず、それによつて各人に用いられ、此の道具の價值を奪い去られる事はないのである。異なる所は精神分析學が彼等に示した諸事實の解釋のみなのである……

されば精神分析學は單に探求方法及主説明理論のみではなくして此は又他の作用を持つて居る。精神分析學が発見される機縁となつた實際的目的に思い及ぶ時、吾々はこの第三の見地に於て、この學理の中にも亦或は特に治療法を見る事が出来るし、他の諸精神療法に比較してこれの優れる點を論議する事が出来るのである。レントゲン線の発見の際、又それより生ずる諸科學にあつても同様のことがあつたのである。吾々同時代のものはその中に單に放射線寫眞術、内組織の缺陷を検證する新しい道具を見知るのみでなく、なほ進んで放射線療法を見る事が出来るのである。

何故ならば、瘤腫の存在を曝露するその同じ



## 和文エス 譯添削欄

編輯部

多数の方々が應募されたことを大變よろこばしく存じます。實は九月號で出題のものを十一月發表のつもりでしたが繰上げて本號で發表します。九月號提出の課題第二は十月廿日締切として十一月號發表に変更します。應募されなかつた方々も他山の石として大いに御研究下さい。

## 1. 己れを知るは難し

Koni sin mem estas malfacile.

己れを知るは koni sin と不定法にします。mem はなくてもよろしいあれば意味を強めます。この文で主語は koni sin 即ち動詞(不定法)ですから難しといふのを malfacila とせず副詞形にして(動詞を形容する語は副詞であるべき故) malfacile とします。これを Estas malfacile koni sin mem とおきかへてもよろしい。Estas malfacile ke oni konas sin mem. とかいた方もありましたが簡單ではないがこれでもよい。koni min としたのなどあつたが min は私をであつて己れ自身をの意味にならない。malfacile ke koni sin mem といふのもあつたがこれでは malfacile が何か判らぬし(Estas といふ動詞がないから)又 koni sin に ke といふ接續詞がかゝつてゐるのは變、ke のあとはやはり不定法以外の動詞がないと文をなさない。koni を scii にしたのもあるが scii ではよくない。又 kompreni でもよくない。Tio estas malfacila ke trovi min mem. これは ke 以下がまちがつてゐます。ke oni konas sin mem とかへればよくなります。

## 2. 自動車は川の中へすべりこんだ

Aŭtomobilo englitis en la riveron.

Aŭtomobilo に la をつけてもよろしい(場合によつてちがふが之だけの日本文だけではどちらか不明) rivero の方は la がある方がよいと思ふ。(la がなければどれだかわからぬ川へ落ちたことになつて變です。) すべるは gliti すべりこむは en-gliti. 川へは en la riveron と方向を示す故目的格とします。en la rivero ではいけません。…glitante eniris といふのがあつたがまちがひではないがギョチない。enŝoviĝis, glitfalis 等も bona esprimo

です。…enfalis sin en rivero といふのがあつたが之はよくない、之を enfali en la riveron と直せばよいがこれだと落ちこんだ意ですべりこんだにならない。glit-iris といふのもあつたがピッタリあはない。

## 3. 今日は寒い日だつた

Estis malvarmege hodiaŭ.

Hodiaŭa vetero estis malvarmega. といふ云ひ方は少し重苦しい。これは大抵上と同様であつたが中に Estis kalte tiu ĉi tago. といふのがあつた。kalto はエス語で「えんこう草」といふ植物の名です。獨逸語の kalt と混交された事と思ふ。tiu ĉi tago が主語の様な形で kalte と副詞形で變ですこれは Estis malvarme en tiu ĉi tago とすれば文法上正しくなる。但し tiu ĉi tago は必ずしも今日には限らない。「この日は」の意である。

Estas estinta malvarma hodiaŭ. といふのもあつたが之は今日だから estis (過去)とするのも變と考へられて estas estinta とせられたと思ふが夕方か晩に今日…であつた(estis) といふことはエス語でも云へる。Ekzercaro (§18の15)に Miaj fratoj havis hodiaŭ gastrojn といふのがある。

## 4. 彼は 大變 腹をたてゝ彼女に 手をかけました

Tre koleriĝinte, li batis ŝin.

日本文を態と變にしたため却つて種々の答をえましたが batis ŝin のつもりでした。

Li tiel ofendiĝis ke li surmetis al ŝi la manon. と譯されたのがありましたあの文ではこうも譯せます。手をかけたを “puŝegis ŝin je sia korpo de liaj manoj.” “trudis al ŝi per siaj manoj.” “metis sur ŝi permanaĵon.” “prenis ŝin de la mano.” “li prenas siajn manojn al ŝian korpon” 等と譯されたがいつれも何の意味だかわからない。問題のよくなかつたことはお詫致しますが之等の譯は又文法上の誤の多いものです。怒つては kolerinte としてもよいでせう。Li tre koleriĝis kaj batis ŝin でもよろしい。

## 5. 何か黒いものが地面に横はつてゐる

Io nigra kuŝas sur la tero.



nigra が io さいふ代名詞を形容してゐるのです nigra io としてもよいが口調悪し。kuŝi と kuŝigi (立つてゐたのが横になること)と kuŝigi sin (=kuŝigi)とをゴツチャに考へてゐるのが多いが kuŝi は状態を示す動詞故御注意下さい。Io nigra を Iu nigra, nek konata iu. Iu malblankaĵo 等としたのはよくないと思ふ。Ia nigraĵo, ia nigra aĵo 等はまちがひではないが io nigra 程氣がきいてゐない。sur la tero を surtere としてもよい。單に terl とか teren はよくない。

## 6. 都合出来次第返金の事

Redonu la monon al mi tuj kiam vi povos.

都合でき次第は返金できるやうになれば (kiam vi povos redoni) すぐ (tuj) 返金せよとの意故こういふ。al mi はなくてよろしい日本文だけでは誰にの意味か不明故「都合つき次第」を ĉe la unua oportuno としたのが大分あつたがこれでも大體よい様だが oportuna は便宜の意故意味が少しちがひはしないかと思ふ。Nepre repagu tuj kiam via oportuneco permesas は後半が少し變。Repagu kiel eble plej frue. 等は「なるべく早く返せ」で意味がちがふ。Permesas redoni la sumon, tuj kiam ĝi estos preparita は前文に主語がなく意味も變 preparita も變である。...kiam estas kapable さいふのがあるがこれは kiam vi estos kapabla さかへればよいが重くるしい。La mono estu tuj redonota tiam la kondiĉo permesos. は tiam のかほりに kiam を入れれば意味をなすがあまりよくはない。...post kiam vi favoriĝos mone も變テコだ。...al vi estos konvene と konvene をつかつたのはまちがひ之れは oportune とすればよい。あつさりさ En bona okazo としたのもある。Bonredonu kiam vi havos bontempon さいふふるつたのもあつた。Redonu monon tuj se vi povus さいふと都合がよければすぐ返金せよと云ふ事になる。

## 7. 僕の知つてゐる所では彼は優しい男だ

Li estas ĝentila, kiom mi scias.

優しいは場合により種々譯される。bonkora もよい。milda homo とはあまり云はない様である。知つてゐる所ではは kiom mi scias としたが laŭ mia scio でも意味は多少ちが

ふが差支へがない。laŭ mia konado, laŭ mia vido, de mia scio 等はよくない。en mia scio でも悪くはないが弱い。

## 8. 彼は酒も飲まねば煙草ものまない

Li ne trinkas vinon nek fumas.

fumi はそれだけで喫煙の意になるが trinkas だけでは水ものまない事になるからいかぬ。ne drinkas としてもよいが多少意味がかはる。

## 9. 蠅が天井にとまつてゐる

Muŝo estas (troviĝas) sur la plafono.

「とまつてゐる」といふ日本語の適譯はエス語にはない様だ。ripozi が適譯かもしれぬ。restas を使つたのも多いがこれでも感じがでない寧ろ esti の方よからん。sur の代りに ĉe を用ひたのも多かつた。ĉe でもよい。estas pendanta sur de la plafono さいふのがあつたが一寸滑稽である。

## 10. 山賊達は爐をとりまいて坐つてゐた

Banditoj sidis ĉirkaŭ la fajrejo.

## 11. 彼は村中で一番の物持です

Li estas la plej riĉa en la tuta vilaĝo.

la plej の次は必しも el に限らない。el といへばその比較された他の物をさす。

## 12. 夫婦はお互に助け合はねばならぬ

Geedzoj devas helpi (unu al la alia: al si reciproke.)

[エス捷徑 63頁参照]

## 14. 閣下どうぞおゆるし下さい

Via moŝto, pardonu al mi (min.)

Via ekscelenco でも結構。bonvolu pardonu min, pardonu, mi petas でも何でも差支へない。Mi petas vian grandaniman pardonon. も大變結構。permesi を使つた人があつたが permesi は許可の意で罪や過ちをゆるすのではない。(以下 311 頁へ續く)



# AL JUNAJ PATRINOJ

M. SASAKI.

**T**IUN ĉi epokon oni nomas “Jarcento de Infanoj.” Tre longe, eble tro longe ja infano estis traktita kiel objekto apartenanta al siaj gepatroj. Ĝian homan indecon oni komencis kompreni kaj estimi nur antaŭ nelonge.

Tamen en antikva tempo, tiu granda profeto Mahometo, kiu kun glavo en unu mano kaj la koranon en la alia batalis pro sia religio, jam tiel frue diris “Ĉiuj infanoj venu al mi.” Ĉu ne eĉ li giganto de sovaĝlando, konvinkiĝis ke instruado de infano estas la plej bona kaj efika rimedo por propagandi sian religion? Efektive la impresoj kaj influoj kiujn oni ricevis infane ofte engravuriĝas en ilia animo mem.

Pri ambicio, aspirado, arto, kaj scienco, ofte patro havas grandan influon sur sia infano. Sed pri ĉiutaga agado kiu ŝajne estas bagatela sed tre grava en sia esenco, ĉar ĝi konstruas karakteron aŭ bonan aŭ malbonan, patrino havas grandan influon sur sia infano.

Inter patrinoj troviĝas multaj kiuj laboras por publika movado, sed tio ja estas ne farebla por ĉiuj patrinoj. Estas unu afero, tamen, kion ĉiu patrino kiu estas Esperantistino povas fari por sia infano kaj kion ŝi povas fari tre bone kaj tre efike.

Kristanoj ne klarigas al sia infano la signifon de la komuna preĝo “Nia Patro,” sed kiam la amataj gepatroj ĉiutage dankas kaj laŭdas tiun kiun ili nomas “Nia Patro” kiu estas “plej bona kaj plej justa,” la infano nature sentas laŭ Zamenhof “Potencan senkorpan misteron mondon reganta,” kaj forta sopirego por vereco, kaj justeco, kaj forta repuŝemeco kontraŭ malpureco kaj hipokriteco senkonscie sed neretireble firme enradikiĝas kaj kreskas en la koro de la infano. Tia homo, eĉ se li poste forlasos religion aŭ formulon de religio, eĉ se li plu ne tenas tradician kredaĵon, lia karaktero jam firme estas fondita sur rokego kiun pluvego aŭ ventego de tentplena mondo ne povas ekskui.

Similan metodon oni povas bone apliki al Esperanta instruado por infano, tute egale oni estas aŭ homaranisto, aŭ utilitariano, aŭ religiano, aŭ ateisto, Nur sufiĉos se patrino rigardas Esperanton kiel spiritan lakton sen kiu infano ne kreskas. Bona patrino estas ĉiam atentema pri la sanstato de sia infano kaj elekto de ĝia nutraĵo. Post lakto-periodo venas periodo de malpeza, sekve tre digestema, nutroplena manĝo por la infano. Estos same kun Esperanta instruado; patrino instruos al sia infano la plej simplan sed la plej bonan vorton kaj frazeton.

〔若き母たる方々へ〕

【註】 jar'cento 世紀。trakti 論ず, 取扱ふ。objekto 目的物。ind'ec'o 價值。estimi 敬意を拂ふ。korano コーラン(マホメット教の聖典)。giganto 巨人。sovaĝ'lando 野蠻國。konvink'-

ig'i 理解す。impreso 印象。influo 影響。en'-gravur'igi 刻み込まれる。ambicio 野心。aspiro 抱負。arto 藝術。ag'et'o 小行爲。esenco 本質。karaktero 品性。krist'ano キリスト教徒。klar'igi 説明す。sen'korpa 身體なき。mistero



Superstiĉa antaŭjuĝo ke instruado de fremda lingvo difektas infanan sanon foje sintrovas. Se tio ne estas antaŭjuĝo, ĝi estas manko de prudento en la flanko de patrino kiu donas al sia infano nutreman sed pezan manĝaĵon kiu taŭgas nur por plenaĝulo. Multe da patrinoj tre bonintencaj sed ne sufiĉe prudentaj havis maldolĉan sperton ke ili difektis spiritan digestecon de siaj infanoj; sed nun ĝenerale estas konvinkite ke ju pli frue oni lernigas al infano fremdan lingvon, des pli facile kaj efike ĝi akiras la konon.

Infanoj de alilanduloj loĝantaj en Japanujo parolas nacilingve kun siaj gepatroj, kaj japane kun siaj japanaj amikoj kaj servistoj. Ili tre nature tre flue parolas ambaŭ lingvojn kaj estas nenia malfacileco aŭ enmiksiĝo.

Unu el miaj nevetoj ĉiam havis respondon de sia patrino en angla lingvo kiam li demandis ŝin nomon de objekto. Gastoj ofte miris aŭdante apenaŭ trijaran infaneton nomi objekton angle. Tiam miron ili havis pro tio ke ili juĝas nur laŭ sia propra sperto, ili ne povis pensi ke la infaneto nur konas tiun vorton kiel nomon de iu objekto, kaj tute ne scias ĉu la vorto estas angla aŭ japana. Foje tiu infaneto volante distri sin en la atendejo de iu kuracisto, kie troviĝis nenia ludilo, kun malfacileco eltiris dikan libron el la sako de sia patrino, kaj tute infanmaniere komencis legi literojn sur la dorso de la libro. Sinjoro kiu sin trovis okaze tie miregis kaj demandis lian aĝon. Tio ja montras ke en la kapo de la demandanto jam sidas la vorto "sociologio" kun sia grava signifo, kaj li tiun momenton tute ne pensas aŭ imagas ke la infaneto nur konas la literojn, sed tute ne scias ke ili faras unu vorton, tiom pli ke ĝi havas ian signifon.

Neniu rigardas tiajn vortojn "lampo," "gaso," aŭ "radio" kiel fremdajn vortojn; estas tiel facile al infaneto lerni facilajn vortojn fremdajn por ĉiutaga uzado.

Ĉu oni timas ke tia infaneto estos mallerta ĉe japana lingvo? Fakte pruvos ke neniom da timo oni povos havi. Oni ĉiam vidas ke infano kiu naskiĝis fremdlande kaj loĝis tie ĝis 11 aŭ 12 jara aŭ eĉ ĝis 14 aŭ 15 jara tute bone koniĝas kaj uzas japanan lingvon kiam li komencis lerni ĝin revenante Japanujon, kaj li tute nature kaj flue uzas ĝin antaŭ ol duono da jaro pasos, kaj oni tute ne povos distingi inter li kaj infanoj naskitaj en Japanujo. Eĉ se oni uzas ekskluzive Esperanton en sia hejmo, en la nuna stato de la societo, nenia timo troviĝas ke infanoj ne konos Japanan lingvon bone, ne, kontraŭe oni trovos ke ili lernas senkompare pli multe da japanaj vortoj ol Esperanton.

Estas tre grave ke parlamento decidu la enkondukon de Esperanto en lernejon, sed samtempe estas treege grave por patrinoj ke ili ne perdu ŝancon por krei gesamideanojn el siaj infanoj, kaj tiun privilegion patrinoj

神秘。re'puŝ'em'ec'o 反抗性。hipokrit'eco 偽善。sen'konscie 無意識的に。ne're'tir'eble ひきもごせなく。en'radik'iĝi 根柢をおろす。formulo 格式。tradicia 傳統的。tent'plena 誘惑多き。apliki 應用す。utilitariano 功利主義

者(=utilismano)。ateisto 無神論者。superstiĉa 迷信的。antaŭjuĝo 憶斷。prudento 思慮。plen'aĝ'ulo 大人(大人)。sin distri なぐさむ、遊ぶ。sociologio 社會學。litero 文字。distingi 區別する。societo 社會。en'konduko 採用。



havas aparte de la publika opinio kiu ondiĝos ankoraŭ longe aŭ favore aŭ kontraŭe por Esperanto kaj internacia spirito.

Nun inter miaj samideaninoj sin trovas patrinoj. Mi estas kortuŝita pro ilia fervora studmaniero; precipe la vivo de unu el ili estas vere admirinda kaj mi volas ĝin sciigi al samideaninoj kiel imitindan instigon.

Ŝi estas kristanino; eble tio helpas ŝin tiel sindoneme kaj amoplene agi por la bono de multaj infanoj; iuj virinoj ofte tre bone helpas siajn infanojn sed ili ne havas volon helpi aliajn infanojn kvankam ili havas multe da libera tempo por fari tion. Tiu patrino ne nur instruadas sian fleton, ŝi tre klopodas por aliaj infanoj por ke ili konu Esperanton nature dum amuzado kaj ludado.

Mi aŭdis ke oni aŭdas "Espero"n kantata de infanoj ludantaj sur la strato proksime de ŝia domo: ŝi instruadis ĝin al ili per fonografo dum ŝi akompanas ĝin per sia ĉarma voĉo. Ni ofte aŭdas himnon kantata de stratinfanoj revenantaj el sia dimanĉa lernejo en preĝejo. Kiel feliĉe kaj esperplene "Espero" sonos kiam gesamideanoj aŭdos ĝin kantata de naivaj infanoj ludantaj sur la strato? Kaj tion eble ĉiu virino al kiu cirkonstanco permesos povos fari; kaj ĉiu patrino senescepte povas instruadi Esperanton al sia infano se nur ŝi volas.

Mi konas du gelaboristojn: unu el ili estis riproĉita kiam li provis propagandi Esperanton inter kunlaboristoj, kaj la alia ricevis insulton kaj mokecon kiam ŝi komencis paroli pri Esperanto al siaj kunlaboristinoj. Nu, junaj patrinoj, vi ĉiuj havas viajn proprajn infanojn al kiuj vi tute libere tute facile povas plenumi vian privilegion kaj devon por instruadi Esperanton se nur vi havas volon.

Oni diras ke "homo estas kulpa kiam li faras malbonon", kaj saĝulo diras ke "homo estas kulpa kiam li ne faras bonon." Ne ekzistas patrino kiu ne faras bonon al sia infano, ĉe ŝi neniom da bono faras al aliaj.

## TRI RELIGIOJ

tradukita de K. Takahaŝi.

*La jena alegorio, kvankam ĝi ŝajnas iom partieme verkita de kristano, iagrade prezentas al ni, oni povas diri, la diferenceon de trajtoj inter Konfucianismo, Budhismo kaj Kristanismo.*

Ebriegulo akcidente ekfalis en profundan fosajon. Ne povante levi sin malgraŭ sir laŭpova penado li laŭte vokis helpon.

Okaze preterpasis tie Konfucio, kaj rimarkante lin diris: "Vi drinkis ĝis vi perdas vian konscion kaj pro tio vi tiel fuŝpaŝis kien oni ne eniru. Estu singardema, ke vi ne ripetu tian eraron en la estonteco." Lasinte tiun admonon li forpasis.

La kompatindulo ege malesperiĝis, sed tuj poste trovis tie Budhon preterpasanta. Tiu ĉi nun diris al li: "Ha, vidu, tio estas laŭ la principoj de kaŭzo kaj konsekvenco. la similajn al kiu oni ne malofte rimarkas



en la mondo. Ĉu elfosaĵiĝi aŭ ne estas tute egale. La mondaj aferoj iras ĉiam tiamaniere, ke plezuro ne estas nepre plezuro, nek turmento restas turmento. Se oni perceptos la veron tiurilate, oni vidos, ke ĉio en la universo estas vantaĵo.”

Li ankaŭ forpasis lasinte tiun predikon.

La kompatindulo jam tiel laciĝis, ke li povas, apenaŭ eldiri peton por helpo.

Tiam venis tien Kristo kaj ekaŭdinte lian ĝemkrion li rapidis savi lin de la turmento dirante: “Nur apogu vin sur min. Tiu estos savita, kiu venos al mi.”

*daŭrigo de p. 2.*

fere la radioterapion, ĉar la samaj radioj, kiuj malkovras ekziston de tumor, povas tuj utili por ĝin forigi.

La tabuleto kaj la kristala bulo de psikaj esploristoj, la skolastika antropologio, la aŭtosugesta kuracado de la Nancy-a skolo, jen estas tute malsamaj aferoj. Tamen oni komparis la psikanalizon kun ĉiu el ili. Ĉar ĝi estas proponata, ni tion diris, kiel metodo, kiel doktrino, kaj kiel rimedo.

*El “Psikanalizo kaj Edukado”  
de P-ro Pierre Bovet.*

光線が又直ちにそれを除去するに役立ち得るからである。

心理研究派の小板や水晶球、中世のスコラ哲學的人類學、ナンシイ學派の自己暗示療法此等は全然別個のものである。然し吾人は精神分析學を此等すべてのものと比較して見た。何故ならばこの精神分析學は前述の如く方法として又一理論として同時に又療法として提出されて居るからである。

ビエル・ボヴェ氏著

「精神分析學と教育」より

(第307頁より續く)

13. 彼が何時來ようとも仕度ができてゐる

Kiam ajn li venos, mi estos preta.

Mi estos preta eĉ se li iam venos. さいふのがあつたがこれは iam ajn とすれば多少感じはでるが kiam ajn で接續するにこしたことはない。Mi … iam ajn li venos としては前後兩文が iam では接續されないから不可である。兩方の動詞共單純な未來がよい。-us だと萬一來てもさいふ意になる。mi とせず ĉio estos preta (pretigita) としても上文の 에스譯としては差支へない。se li venos ĉiuokaze さいふのがあつたが變である。之は Mi estos preta ĉiuokaze (en ĉiu okazo), kiam li venos とすれば多少ましかもしれない。

15. 政界の新人鶴見氏作一大理想小説

Ideala novelo verkita de S-ro Curumi, freŝulo en la politika rondo.

新人は novulo では novico の意にされてよくないと思ふ。freŝulo は面白いと思ふ。novidea, progresanta, novleviĝanto 等もよい。nova politikisto もピッタリこない日本語の「新人」さいふ語の適譯はない様だ。政界を regrondo, regadsfero とするのは政權をもつてゐる者のみが政治家の様に見える。

【評】 一二の人をのぞいてあさは十分の成績とはいへない。單語をまちがへても文法的に正しい文を書いてほしいと思ふ。ke koni, ke pardoni, kiam ajn veni 等かなり多かつたのが多いのは遺憾。高點者朝見、土肥、伊藤、金、福西、富田、坂室、土屋、桑原、勝枝、妹尾、越田、江上、津田、藤原。

★★次の課題は九月號275頁にあり★★



studento. Li ne havis okazon prezenti sin al vi. Li ofte iris antaŭ la pordegon de via lernejo por vin vidi, kaj ankaŭ ofte vagadis ĉirkaŭ via domo. Kiel ofte li staris ekster la muro de via domo, aŭskultante belan muzikon, kiun supezeble vi mem ludis sur piano, iam li eĉ ploris.—Tiel li konfesis al mi. Li ofte intencis alparoli aŭ skribi al vi, sed li kompatinda malkuraĝulo ne povis ĝin plenumi, timante, ke vi prenus lin por senvirta amĉasanto. Tiel pasis tempo, kaj kiam vi estis gradigita de la lernejo, estante jam 18-jara, okazis al li granda malfeliĉo, tio estas, la amafero inter vi kaj S-ro T. Dum li timeme hezitis, S-ro T., kiu estis jam konata kiel talenta kritikisto en literatura mondo, kuraĝe alproksimiĝis al vi kaj fine sukcesis kapti vin. Li estis la plej intima amiko de S-ro T.!

M.—Kiu do li estas? (*ekkrias*).

K.—Atendu, sinjorino! Kaj prezentu al vi, kiel mizera estis lia situacio, kiam li informiĝis pri la triumfa akiraĵo de sia amiko per lia propra buŝo, tio estas via letero, en kiu vi skribis, ke vi estas jam lia, se nur viaj gepatroj konsentas. Neniu scias krom li mem, lian malesperigon kaj suferadon de postaj jaroj. Al neniu li povis konfesi sian malfeliĉon, neniel li devis konkuri kun sia konkuranto, neniu li povis malami nek malbeni. Ĉio ĉi tio duobligis, triobligis, lian suferon. Kiel ĉagrenita estis li, kiel dolora estis

lia koro, kiam li devis aŭskulti ĉion, kion la amiko ebria de ĝojo raportas tute malkaŝe eĉ fanfarone pri la progresado de sia amo, pro kio li mem estis tiel suferanta. Li devis ne nur sindetene aŭskulti, sed ankaŭ konsenti ĉiujn vortojn kaj eĉ doni necesajn konsilojn, premkaŝante sian doloron. Fine ĉe la edziĝa ceremonio, li devis fari gratulan paroladon reprezentante amikaron de S-ro T.

M. (*kun ekscitiĝo*)—Vi mem faris tion, ĉu ne?

K. (*per mangesto silentiĝas la virinon*)—Kial li ne forlasis vin ambaŭ, se oni demandus, lia respondo estus, ke li ne povis forgesi vin, sen vi li ne povis vivi. Por li, la amo estis nemulte esperebla de la komenco, tial li rezignis tiom, ke li nur konsolis sin per la amikiĝo je vi. Almenaŭ tio ĉi estis laŭvole al li disponita feliĉo, ĉar, se vi estus edziniginta je iu alia, kiun li ne konas, lia sorto estus pli kruela. Li decidis en si mem, ke li neniam forlasu tiun feliĉon. Lia revo tute ne estis difektita, ĉar lia malespero ne estis kaŭzita de via rifuzo. Vi ĉiam akceptis lin kun plena afableco kaj konfido kiel vian propran amikon. Ŝajnis al li, ke vi fariĝis pli bela, estiĝinte edzino, kaj lia amo iĝis despli-kaj-pli neretenebla.

M. (*pli kaj pli ekscitiĝas, korusiĝas, kaj ekploras*.)

K. (*daŭrigas kvazaŭ ebria de siaj vortoj*)—Kiam S-ro T. tute ne atendite mortis pro tifo, li tute konsterniĝis, kelkajn noktojn li ne povis ekdormi. Kiam li kuŝis



en lito larmoj fluŝis senĉese, tamen li mem ne sciis ĉu li ploras pro la malfeliĉo, ke li perdis la plej intiman amikon, aŭ li ploras pro la reesperigo, ke vi fariĝis denove solulino. Kiam vi decide insistis, ke vi restos vidvino por ĉiam, kaj komencis kurage labori por emancipo de subpremataj virinoj li tute kortuŝiĝis. Sed, kvankam lia bedaŭro por la morto de sia amiko ne estis malgranda, ankaŭ estimo al via sincera decido ne estis malalta, tamen, malgraŭ ĉio, li ne povis premeigi iom-post-iom levigintan ĝermon de reviviginta espero. Kia malhomeco! Kia malnobleco! li ofte riproĉis sin mem. Sed spite ĉion, li ne povis ne esperi. Li atendis nur pro la zorgemo, ke li ne malsukcesu, kaj respekto al la bedaŭrata amiko kaj ĉasta vidvino. Sinjorino! Ĉu vi ne akceptus lin. Nun li staras sur la sojlo inter morto kaj vivo. Kaj jam vi klare scias, kiu li estas. Li sidas antaŭ vi surgenuje, petante vian manon. (*Li alproksimiĝas al la virino kaj genuas antaŭ ŝi, ekprenis ŝian manon.*)

M. (*Ekstreme ekscitita, ekstaras, ŝovas sin malantaŭen, konfuziĝe*).—Ne, ne, ne, sinjoro, ne tuŝu min, ne alproksimiĝu al mi! Ĉu vi estis tiel min amanta! Ho! Kiel fari Aa,a,a. Ne, ne! Mi estas lia. Mi estas decidinta (*dirante tiujn ĉi vortojn ŝia voĉo iom tremiĝas, malfortiĝas, fine ŝi ekploras, kaj fale*

*eksidas sur la seĝon ekkuŝiĝas la rizaĝon sur la brakojn sur la tablo*).

K. (*kvieste restariĝas kaj revenas al la seĝo, sidiĝas—kun krucigitaj brakoj sur sia brusto rigardas plorantan virinon*).

(*Paŭzo*)

—Pardonu min sinjorino! Mi ekscitis vin tro multe. Nur pardonu! (*ŝanĝas tonon*) Tamen, sinjorino, ŝajnas al mi, ke vi mensogas, eble vi mem ne konscias, ke ĝi estas mensogo, sed via decido jam ne estas firma, mi estas certa.

M. (*Subite rektiĝas*).—Pro kio vi diras tion? Ĉu vi volas ofendi min, sinjoro?

K. (*kompateme*).—Ne! tute ne! Kial mi vin ofendus! Kontraŭe, mi estimas vin ekstreme. Mi amas vin pli ol ĉion en la mondo. Sinjorino! Ĉu vi ĝisfine rifuzos mian peton?

M.—Vi vane ripetos!

K.—Ĉu vi volas resti soleca vidvino, nur pro la dolĉa memoro?

M.—Kompreneble (*kvazaŭ murmuro*). (*Ŝi ekstaras kaj aliras al la portreto de la mortinta karulo kaj rigardante tion*.) Bonvolu forlasi min, mi petas!

K. (*rigardante dorson de la virino subite ekridegas*)—Ha! ha! hahaha!

M. (*turnas sin surprizite*).



K.—Sinjorino! Via kimono estas forte makulita de argilaĵo!  
M. (*ekpalpas kimonon je glutea parto tute senkonscie—ŝia vizaĝo subite ruĝiĝas*).

K.—Sinjorino M., mia amatino! Ĉesu la obstinadon! Ĉu vi ne rigardis bone la vizaĝon de tiu fripono, kiu atakis vin survoje. Ne insistu malsaĝaĵon antaŭ mi, kiu scias pli bone ol vi mem. Ke vi lin forpuŝis, ke vi povis fine forkuri..... hahahaha! —estas tamen ne malvero. Efektive vi forpuŝis lin, kaj forkuris de li, sed estis sufiĉe da tempo de kiam vi estis kaptita!

M. (*preskaŭ svenas*).

K.—Sinjorino M.? Mi estas aktoro, ne nur sur scenejo de teatro, sed ĉie, ĉiam, mi estas aktoro! Iam mi estas sinjoro, iam almozulo. Iam agas socialiste, iam kiel poetaĉo. Ie mi estas bravulo, kaj aliloke estiĝas ar'ekeno. Antaŭ du horoj mi estis min-laboristo, fripono, kiu atakis solirantan sinjorinon survoje! Nun mi aperis antaŭ vi, kiel amsopiranta junulo!

M. (*ekscito jam forlasis ŝin, ŝi sidas duone sveninta, malĝoje*).—Ĉu do ĉio, kion vi faris al mi estas ankaŭ ludaĵo?

K.—Jes! (*emfaze*.) Sed ne pensu, ke mi faris falsajon. Ĉio, kion mi ĵus diris estas nenio alia ol vero mem. Nenion mi kaŝis, nek aldonis. Kvankam mi estas aktoro mi neniam faras falsajon. (*ŝanĝas tonon*). Ne

nur mi, sed ĉiu, preskaŭ ĉiuj homoj aktoras, laŭ mia opinio. Ĉiutaga vivo mem estas kvazaŭ teatraĵo. Iu ludas solan rolon dum sia vivo malsaĝe sin limitante, alia ofte ŝanĝas sian rolon, ne sukcesante eĉ en unu rolo. Ankaŭ sintrovas tiaj homoj, kiuj prenas sur sin diversajn rolojn samtempe tamen multaj ludas nur fuŝe, ĉar ili ne povas mem pravigi sian ludadon, plie preskaŭ ĉiuj elektas al si ne taŭgan rolon, kaj portas superfluan suferon ĝis morto.

Ankaŭ vi estas lerta aktorino, ĉu ne? Sur la maluma voĵflanko vi estis natura virino, kaj ĉi tie mi trovis vin kiel ĉastan vidvinon, kiu sin dediĉas al la komuna feliĉo de virinoj, rezignante ĉian amplezuron, krom la rememoro de pasinta amo. Sinjorino M.! Nun mi ĉion malkovris antaŭ vi, ankaŭ vi forŝiru ĉian kovraĵon de via koro, kaj akceptu mian amon! Sinjorino M., kial vi estas tiel malgaja? Ĉu vi restas por ĉiam fidela edzino de S-ro T.? Ĉu vi ne amas min? Bonvolu respondi, mi petas!

M. (*ellasantе ĝemkrieton aranĝante tian mienon, ke oni vidas malĝojon miksitан kun ĝojo sur ŝia vizaĝo, turnas sin al li*).

K. (*silente ekstaras, ĉirkaŭprenas ŝin. Iliaj lipoj malrapide alproksimiĝas reciproke*).

(Kurteno falas).



のです。受身分詞の後に或る他の意味での単一の前置詞“de”を用ひることは常にさければなりません。例へば“lia propra poŝhorloĝo estis ŝtelita de la hoko, sur kiu li ordinare pendigis ĝin”の代りに“for de la hoko…”と云ふ方がよいでせう。又“ŝi troviĝis ŝirmata for de liaj entreprenoj”といはずに“kontraŭ liaj entreprenoj”と云ふ方をお勧めしたいのです。(La Revuo, 1908, Majo.)

### 受動の後の“per”

受動(pasivo)の後へ前置詞“per”をおく事が出来る場合といふのは其動作をなした者を表はすのでなく或る他の動作者によつて用ひられた手段(rimedo)を示す語の前へ来た時です。例へば“la letero estas skribita per blua inko”(即ち“blua inko skribis leteron”ではなく*iu persono skribis la leteron, uzante por tio bluan inkon kiel rimedon*)であるが“la tero estas kovrita per neĝo”といふのはよくない、何となればこゝでは誰かが雪でもつて地面を蔽つたのではなくて雪自身が地面を蔽つたのだから従つて雪自身が行爲者であるからその前へ前置詞“de”をおかなければならない。受動の後の前置詞“de”は常にもしその受動形の文を能動形になほした時その“de”の前にある語が文の主語となることをしめすものである。(La Revuo, 1908, Majo.)

### “po”

或る分量を示す語の前にある“po”はその分量が總べての人又は總べての物全體に係つてゐるのでなくして各のものに別々に係つてゐるのである。例へば“ili ricevis po kvin pomoj”と云ふのは皆が一緒に五箇だけ貰つたといふ意味でなく彼等の各人が別々に五箇宛もらつた(*ĉiu el ili aparte ricevis kvin pomojn.*)ことを示すのです。“la drapo kostas po 2 spesmiloj por metro”=*ĉiu metro(ne la tuta drapo) kostas 2 spesmilojn.*である。“ili vendas pogrande”とは彼等の賣る個々の量が多いのである(即ち彼等はたゞ大量づゝ卸賣るのみである)。

それで“je 80 centimoj po funto”或は“30 mejlojn po horo”といふ事はできないのであつて“po 80 centimoj por (ĉiu) funto”或は“po 30 mejloj en horo.”といふべきである。

(La Revuo, 1908, Aŭgusto)

### 不定法の前の前置詞

すべての前置詞はその論理的本質に従へば單に名詞の前にのみに用ひられることができるのみです。従つて若し動詞的の意味をもつた語の前に前置詞をおきたい時にはその動詞的意味の語に名詞の形を與へねばならないのです; 例へば“kun saluti”, “sen respondi”といはずに“kun saluto”, “sen respondo”と云ふべきである。若し“por”や“anstataŭ”が不定法の前に用ひられるとしてもそれは或る種の除外例といふわけではなくかゝる用法の原因は他のものであつて即ち: 不定法の前に用ひられた“por”や“anstataŭ”なる語は純粹の前置詞の意味でなく殆んど接續詞の意味であつてかゝる場合に於てその傍に名詞を置くことは不可能です; 例へば“anstataŭ stari li sidas”なる文に於て“stari”なる形を“stari”によつて代用することができない、しかも一方他のすべて純粹の前置詞に於ては常に名詞の形をした動詞的意味の語を用ひることができる(例へば“sen ion diri”の代りに“sen ia diro”)。

(La Revuo, 1908, Majo)



記のスウェーデンの方は今日では既にそれがどんな結果を生じたかをさ  
 ざりました：即ちそうして作つた言語は發音が優美でなく且つ不規則  
 なものになつてしまひ彼が我々の事業を破壊してまでも阿諛しやうと  
 した自國人瑞典國人さへ誰もその變更を受諾するものがないのに一方  
 かほゞ非瑞典語的（“malsveda”）な現在の我々の言語に對しては澤山  
 の瑞典人が同志として之を支持し且つ彼等にとつて何等かの定まつた  
 ものになる迄に死滅してしまつたこの瑞典語化された言語よりも遙か  
 に便利であり親しみやすいものであると氣付きました。又スラヴ人で  
 我々の同志である某氏は國際語はロマンス、ゲルマン語系と同數だけ  
 のスラヴ系の語を持つてゐなければならないと考へました。そこで彼も  
 亦多數のスラヴ語をもつた新言語を創造しやうとしました；併し間も  
 なく彼には單に他の民族にとつてのみならずスラヴ人にとつても我々  
 の言語にあるロマンス・ゲルマン系の語の方が單にロマンス・ゲルマン  
 系統の言語中に混在して却つて耳障りにきこえスラヴ人自身にさへ他  
 のスラヴ系でない語よりも一層判りにくくなつてしまつたスラヴ系の  
 語よりも遙かに便利であり氣持のいいものであると云ふことを會得す  
 るに到つたのです。若し私の記憶がまちがひないならばその彼の言語  
 では“internacia”といふ語は“mejufoka”となつてゐた様でした；  
 併しスラヴ人のごなたか“internacia”と“mejufoka”のごちらが  
 一層わかりよく記憶し易いかを云つてもらいたいものです？ 其人は  
 mejufoka といふ語を何か支那語の辭書ででも探さうとなさるでせう、  
 そしてこの語が自分の所有物たるスラヴ語の“meĵdu”とドイツ語の  
 “Volk”との合成によつて作られ二つの子音が相並んで存在できぬた  
 め“d”と“l”とが消失してできあがつたものであると云ふことが  
 頭に浮んで來はしないと思ひます。）若し其の方(が)が他の人々と同様  
 に自己の提案を單に理論上からしたのだつたら其のかたは今日でも猶  
 自分獨自の考へに留まつてゐて我々が甚だしく頑固で此の『必要な  
 』變更を採用しないことを怒つてゐるでありませう；併し幸ひにも  
 其のかたは實際上の試みをやつてみられたのですそして其の實地試験  
 が其人を最もよく説服したのですそして今日は再び今の形のまゝの我



## 變 更

若し變更についての提案が單にあれこれの國民に對するまづい媚び諂ひのため以外に何等の目的もなくしかも之によつて媚びた國民に對してさへ何の利益をももたらすことなく單に我々の事業そのものに對して絶大の害を齎すといふ様なものならばかゝる國民的趣味による提案は個人的趣味による提案と同様にできる限りさしひかへるべきものである。例をあげれば今は非常に熱心な我々同志の一人なる某氏は最初は此言語が殆んど一語もロシヤ語を含まないが故に『十分に國際的でない』といふ理由から大變憤激して居られたのでした。既にいろんな人々が『國民間の友誼』を綱領とする我々の事業に向つてかゝる偏狹な偽愛國心をもつてぶつかつてきたために我々は大いに悩まされました。或る人々は我々の初御目見得たる最初の教科書がロシヤ語で出たこと云ふ理由から我々の事業に對して敵對的にぶつかつてきたのに——一方上に述べた方は初めの中は Volapük が “ibo” と云ふロシヤ語をもつてゐるのに我々のはそれに對して變形したフランス語 “çar” をもつてゐるから我々の事業はロシヤ國民に對して敵對的であると認めたのです。——又瑞典の或る雜誌の編輯者たる某氏は我々の言語は餘りにイタリヤ語的性質を持ち過ぎてゐることを見たのです。そして我々が彼の提案を採用し又何等目的なしに我々の言語を『反イタリヤ語的にする』(“malitaligi”) ことを受け容れなかつた時彼提案者は長く辛抱せないで自ら自分の考へで一層北方諸國民に氣に入ると思はれる様な言語的混淆物を造りあげることを試みました。若しこんな風に各國民が單純な虚榮心から其れに自國民的の性格をおぼしめやうと欲したならば我々の事業がどんなものになつてしまふかはこゝに語る必要もない程判りきつたことです。即ち我々の事業は絶対に不可能事となりませう。而して若し其れが可能なりとしても——その媚びへつらはれた國民がその結果として何物を得るでせうか？ 最初に自分の提案した變更が必要であること云ひ或る期間の間いろいろ試験をやつてみた上



最  
新  
刊

# 秋田氏渡歐紀念出版!!

秋 田 雨 雀 氏 原 作

須 々 木 要 氏 } エス 譯  
守 隨 一 氏 }

【星野浩吉氏裝幀】

## 秋田雨雀戯曲三篇

菊半截 74 頁美本 定價 40 錢 送料 2 錢

我が國文壇に於て獨自の地歩を占め、しかも我がエスペラント界の闘士として陰に陽に我がエス運動に盡されつゝある秋田雨雀氏が九月三十日東京驛發赤露の劇壇視察行脚の途に上らるゝに際し同氏の行を盛んにし同氏多年の恩顧に報ひんためこゝに同氏の力作三篇をエス譯して出版することにした。

紀念出版なるを以て菊半截 74 頁のものを僅か四十錢といふ至廉の價をもつて提供するものであります。一日も早くおもてめ下さい。

### ＝ 内 容 は ＝

スダラの泉 (Fonto de Sudroj)  
骸骨の舞跳 (Danco de Skeletoj)  
國境の夜 (Nokto ce Landolimo)

東京市牛込區新小川町 3 の 14

財團法人 日本エスペラント學會

振替口座東京 一一三二五番

★裝幀優美★價格至廉  
★譯文流麗★珠玉名篇



## 故東宮豐達君遺兒教育後援會

既に前月號でお知らせしました様に我々一同で上記の會をおこし  
故東宮君の生前の功績にむくひたいと存じます。

どうか私共の微意御諒察の上御賛同御助力下さいます様御願ひ致  
します。尚御知り合の方々へもおつたへ下さいませ。

東京市外目白文化村五七 西成甫方

### 東宮君遺兒教育後援會

發起人 一同

#### 寄附規定

- (一) 寄附金額は一口二圓又は其以上の事。一人の寄附は二圓以上でもすべて一口とす。
- (二) 御送金は上記會事務所又はエスクラピーダ・グループ(振替東京75525)へ(但し其  
際は遺兒教育會へ寄附の旨明記されたし)
- (三) 寄附者には記念として近刊の東宮氏譯の有島氏の「惜しみなく愛は奪ふ」の特製  
本(四六版百二三十頁)を作つて贈呈すること。
- (四) 一口三圓以上の寄附者には上記の外何か適當なものを贈る事。
- (五) 締切——昭和二年十二月末日。〔詳細は前月號參照の事〕

## 秋期大廉賣!!

——在庫品四千貳百八十餘圓也

内外  
エスぺラント書籍

「本年三月より最近八月に至る  
迄の新着、在庫品全部提供

## 五割引——藏拂一掃!

期間——昭和貳年十月一日至十一月末迄

(但し賣切の節は期間内と雖も締切)

大聲叱呼喚々たる廣告文を省いて  
全國の讀書子に訴ふ。

速刻「五割引總目錄」(二錢切手同封)お申込み下さい。

東京市牛込區矢來町ビルデング

四方堂



エスペラント研究會々長

佐々城 佑先生著

四六版六十餘頁・脊クロース  
厚表紙・定價五十錢送料二錢

# 模範エスペラント讀本

エスペラント講習用書は今までにその種類が少くない。しかも本社が今新たにこの模範エスペラント讀本を世に送る所以は著者佐々城先生が多年の經驗を基として全く新たな構想の下に編まれ、以て本書が、讀める、書ける、話せる、三拍子揃つた眞のエスペランチストを養成する理想的な標準講習讀本であるがためである。全篇を二十五課に分ち徒に文法に走らず自然的にエスペラントを覚え込ませるやうに配列してあり、尙卷末には各科について一々エスペラントを以て教授上注意すべき點を附記し講習指導者の參考に供してある等實に懇切を極めてゐる。先づ今秋の講習會より御使用を。十部以上一割引。

梶弘和『和エスペラント』は延引に延引を重ね大變御迷惑をおかけ致して申譯ございませ  
ん。今後はかゝる失態を繰返さないやうに致します。因に本讀本は既に發行されて居  
りますから御注文次第急送いたします。

ユーナ・アジール

梶弘和氏編輯、月刊  
エスペラント新聞 年五十五錢

緑の朝

梶弘和氏著、講習副讀本  
菊半卅六頁・參拾錢稅二錢

模範エスペラント會話

由里忠勝氏著  
定價一圓廿錢 郵稅四錢

父歸る

菊地弘和氏原作  
譯

洗濯屋と詩人

金子洋文氏原作  
故東宮豐達氏譯

范の犯罪

志賀直哉氏原作  
梶眞知子氏譯

エスペラント研究社

東京青森町北七ノ二  
五二一三



## KORESPONDA FAKO.

- ★ Germanujo—S-ro Hans Oehmichen, Magdeburg, str. Wilh. Kobelt 5; 文通希望
- ★ Japanujo—S-ro Bak Košida, II-209, Senzoku-cho, Asakusa-ku, Tokio; dez. interŝ. I.P. de teatraĵoj kun nordeŭropanoj.
- ★ Japanujo—S-ro Kuwahara-Toŝihide, Misasagi, Yamasina, Kioto-fu; L.I.P.(bdf), P.M. kĉl. nepre resp.
- ★ Japanujo—S-ro Hiroŝi Kanimura, Kameoka, Kioto-fu; I.P.G. kĉl.
- ★ Anglujo—S-ro Alvis Churgleu, 12 Sandholme Rd Brislington, Bristol, 文通望
- ★ Hungarujo—D-ro Kukács Gyula, VII, Pihangó ucca 13. Budapest; 東洋人と文通希望何か記念品を書留でおくれば當方も當國記念品をなくる。
- ★ Germanujo—K-do Bruno Rönnebeck, Berlin, N. 20. Koloniestr—129; IP. bdf.
- ★ Germanujo—S-ro F. Urbanczyk, Potsdam, Charlottenstrasse 2; 文通希望

誌雜刊月

◎國字問題解決の先驅◎

## ローマ字世界

定價 部一 錢十二 圓貳金前年一

- ◎日本の國字となるべき名譽と運命をもつた日本式綴方によるローマ字の雜誌!
- ◎標準的綴方としての日本式ローマ字を應用し實際化したローマ字の雜誌を御覽なさい!
- ◎ローマ字の日本式綴方の論據、要點等に就ては郵券二錢を御送り下されば『ローマ字のすすめ』といふ小冊子を差上げます。

財團法人 日本ローマ字社

東京市本郷區駒込曙町十一番地  
振替東京二一五〇四・電話小石川七〇一

秋田雨雀・小坂狷二共著

## 模範エスペラント獨習

改訂第十八版

西洋の教科書の燒きなほしではない。語系を異にする日本人の爲めに全く新しい様式で講義されたものである。外國語の素養なき初學者も趣味のうちに習得が出来、既にエスペラントに熟達した人も他書に見出し得ぬ知識を求め得られる。〔布裝三八〇頁・定價二圓・書留送料十九錢〕

プリヴァ著・松崎克己譯

## 愛の人ザメンホフ

他の萬國語が盡く失敗せる中にエスペラントのみひざり今日の隆盛あるは何故ぞ。それは此の語が優秀であるのと幾多熱心の士が崇高なるエスペラント主義、即ち人類主義に感激し、身をすて、普及に努力し、努力しつゝあるからである。人類主義の教科書たる本書二〇〇頁を讀むはエスペラント學習者の義務である。〔定價金一圓・書留送料十三錢〕

振替口座東京  
四二八八番

閣

文

叢

東京市牛込區  
神樂町二丁目



いよいよ十月十二日發賣

從來の型をやぶつた新讀本の出現

天高肥馬！ 燈下可親！ 將に講習の好時期です。

敬愛する我が同志諸君！！ 本書を御活用下さい。

井上萬壽藏氏著〔中垣虎兒郎氏挿繪〕

# エスペラント讀本

四六版本文五十餘頁 上質紙印刷 挿繪五十個

〔定價 30 錢 送料 4 錢〕

エスペラント講習讀本として從來出版されたものは餘りに  
高程度のもので多く、時に難澁な文法を強いることなきを保  
しがたいものであつたが、今度井上君が一年にあまる推敲の  
結果できた本書は文法をまつこうから説明せずに多數の挿繪  
を用ひて知らず知らずの中に文法をおぼえこんでゆく様に工  
夫されたものである。それ故外國語の素養の少いものに用ひ  
て最も適當であり、興味の中に日常必須語彙に親しましめ且  
必要な文法がしらない中におぼえられる様になつてゐるから  
各地での講習會で大いに活用されんことを望む。

★發賣期日はまちがひなく十月十二日です★

發行所

東京市牛込區 財團 日本エスペラント學會  
新小川町3の14 法人

【振替口座東京 11325 番】

挿繪入りの講習讀本の出現！

エス語界に新しい福音！



我國におけるエスペラント普及・研究・實用の中心機關

# 財團法人日本エスペラント學會

【東京市牛込區新小川町三の十四】 【振替口座東京11325番】

◆すべての運動は大衆の協力に俟たねばならぬ。今やエスペラント普及運動は最も多衆の協力を必要とする時代。各地同志の大同團結が必要だ。個々人の叫びは個々人の叫びにすぎない。大衆の叫びは輿論の喚起だ。組織だつた協力こそ眞の力だ。

◆エスペラントを愛するものは誰しも御入會下さい。(會員は法規上維持員とよぶ)

- 目 的** エスペラントの普及・研究・實用
- 事 業** (a) エスペラントに関する各種の研究調査及其發表  
(b) 雑誌及圖書の刊行等  
(c) 講演會、講習會の開催及後援  
(d) 其他本會の目的を達成するに必要な認むる事業
- 會 費** (a) 普通會員 年額2圓40錢 (b) 贊助會員 年額5圓  
(c) 特別會員 年額10圓以上 (d) 終身會員 一時金100圓
- 入會手續** 住所、職業、姓名(振カナ付)を明記し會費一年分を支拂へばよい。  
(振替送金最も安全)
- 會 員 の 典** 1. 毎月研究雑誌“La Revuo Orienta”の配布をうく  
2. 出版圖書の割引をうくることあり  
3. 語學上の質疑其他一般の問合の返事をうく  
4. 宣傳の「葉」その他宣傳材料を無料でうくることを得

詳しいことは直接御問合せ下さい

## 役員名簿 (五十音順)

|     |          |         |     |            |         |
|-----|----------|---------|-----|------------|---------|
| 理事長 | 理 學 博 士  | 中村 精 男  | 理 事 | 帝大教授醫學博士   | 西 成 甫   |
| 理 事 |          | 上 野 孝 男 | 同 同 | 慶大教授醫學博士   | 美野田 琢磨  |
| 同 同 | 元鐵道省運輸局長 | 種 田 虎 雄 | 同 同 | 東京朝日新聞顧問   | 望月 周 三郎 |
| 同 同 | 東京女子大學教授 | 河 崎 な つ | 同 同 |            | 柳 田 國 男 |
| 同 同 | 中央大學教授   | 川原次吉郎   | 同 同 |            | 大 井 學   |
| 同 同 |          | 何 盛 三   | 監 事 | 高層氣象臺長     | 三 石 五 六 |
| 同 同 | 帝大教授文學博士 | 黒 板 勝 美 | 同 同 | 神奈川縣立農業學校長 | 大石和三郎   |
| 同 同 | 政治教育會會長  | 小林鐵太郎   | 同 同 |            | 清水勝雄    |
| 同 同 | 政修大學教授   | 高楠順次郎   | 同 同 |            | 木 崎 宏   |
| 同 同 | 帝大 名譽教授  |         | 同 同 | 顧問 帝大 教授   | 穂 積 重 遠 |
| 同 同 | 文 學 博 士  |         | 同 同 | 子 法學博士 男   | 三 島 章 道 |

|                  |            |            |                 |   |            |            |             |                      |  |   |  |
|------------------|------------|------------|-----------------|---|------------|------------|-------------|----------------------|--|---|--|
| (郵税共)<br>本誌購讀料   |            |            | 口座番號<br>本會振替    |   | 廣告料        |            |             |                      |  | 發行所<br>財團法人日本エスペラント學會<br>東京市牛込區新小川町三ノ十四 |  |
| 一部<br>半年分<br>一年分 | 錢 24<br>圓  | 錢 140<br>圓 | 學會々員には無代<br>頒布す | 基本金專用東京三〇八九番<br>一般長野三二八三番<br>會計用(東京一一三三番) | 1回<br>圓 25 | 3回<br>圓 72 | 6回<br>圓 140 | 12回<br>圓 250         | ◆金銭に關係なき廣告四割引<br>◆表紙第三頁は二割増の事<br>◆表紙第二頁第四頁はお断り<br>◆特別會員の廣告は二割引 | 印刷所<br>株式會社一匡印刷所<br>東京市神田區西小川町二ノ五       | 印刷人<br>編輯兼<br>發行人<br>大井學<br>東京市牛込區新小川町三ノ十四 |
|                  | 錢 260<br>圓 |            |                 |   | 全頁<br>圓 25 | 半頁<br>圓 13 | 四半頁<br>圓 7  | 圓 72<br>圓 37<br>圓 19 | 圓 140<br>圓 74<br>圓 38  | 圓 250<br>圓 130<br>圓 70                  | 昭和二年十月一日發行<br>昭和二年九月二十五日印刷                 |